

10-27

1936/5

教界十傑

序

余教會及び萬國の歴史を繙き偉人傑士の傳を讀む毎に慨然未だ曾て其萬一に倣はんことを期せざるはなしカルヴンの孳々汲々是れ日も足らず宗教改革多難の時に際し政教の事務一身に蝟集するも尙能く之を辨理し綽々餘裕あるか如く筆を秉りて神學の基礎を置き口を開きて諄々福音の道を陳ぶ余輩志操薄弱精神懶惰の士豈爲に慚愧する處なからんやルーテルの豪氣一世を蓋ふ惡



序二
魔の數ウオイムス市街數萬の屋瓦に均きも敢て懼
れず王候博識の大會に望まんとを明言し果て能
く其言を履めり余輩一難に遭へば則ち畏縮して
進まず遂に前途を謬るもの幾度そや日本教會創
業の今日宣教の任に當る者豈此に鑑みる處なか
るへけんやシヨノンツクスの熱心議論女王メレ
ーをして悚然容を取めしむ夫れ世の己を曲て以
て人に容られんとを求め人の貴賤によりて其所
説を異にし人爵を恐れて天職を盡さゝる者爲に

奮起して將來を戒めさらんやウイルバアフォー
スの博愛なる鞠躬盡力屈せず撓せず耐忍十數年
の久きに涉り終に奴隸廢止の目的を達するを得
たりロヨラの獻身纒かに數人を以て一小社會を
組織し漸く其盛大を來し遂に勢力を全世界に及
ぼすに至れり余輩主義を異にするものと雖も其
能く衆を統へ功を奏するの技倆企て及はんとを
望む然らば則ち此輩達士の言行人心に感化を與
ふるや明けと余友田中達君此に見るあり泰西宗

教家列傳を著し以て世に補益する處あらんとす
余大に其舉を美とし斯に此言を陳へて以て序に
代ふと云爾

明治廿六年四月

長崎東山學院に於て

大儀見元一 郎誌

教界十傑

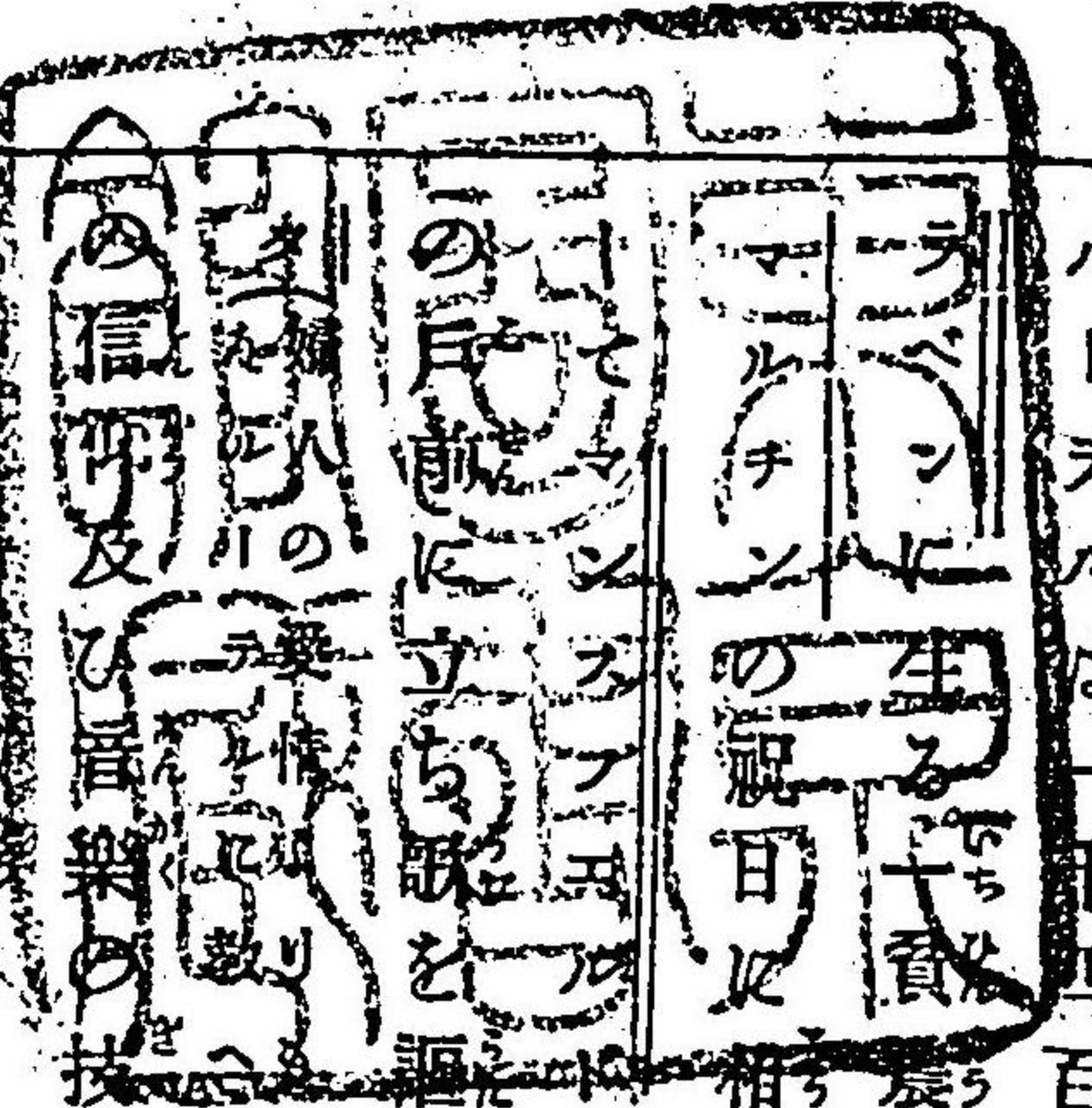
目次

(獨)新教の無冠王.....マルチン、ルーテル	一
(西)軍人的宗教家.....イグナシアス、ロヨラ	二二
(瑞)長老主義の唱祖.....ジョン、カルビン	四〇
(蘇)蘇國の宗教改革者.....ジョン、ノツクス	六五
(佛)尊王家 尊法王家.....ボース、エー	八二
(佛)神秘教寂靜教の好友.....フエチ、ロン	九七
(英)奴隸廢止の率先者.....ウイリヤム、ペン	一二二
(佛)聾啞教育の開祖.....ドレ、ビー	一三六
(獨)東洋の使徒.....シユエヴァ、アルツ	一五四
(英)政治家の摸範.....ウイレル、ベルフ、チャース	一七〇

新教の無冠王

マルチン、ルーテル

(Martin Luther)



ルーテルは一千四百八十三年十一月十日を以てサキツニーのアイスマルチンの生る日相當せ一かば即ち取て名く幼より宗教心篤く稍長の子なり。生後一日洗禮を受けたるに、其の日恰もマクデブルグ、アイゼナハ等の學校に遊び、日々人の高價なるもの婦人なりと稱するものルーテルの兵前に立ち歌を謳ふて僅に其の學資を得たり。偶々一商人の妻コツの信及ひ眉樂の技擲に望を屬し、自ら資を抛て之を助け、十八の時其頃第一流の學校と聞へたるエルフルト大學に入り、際にまで及べり。ルーテルが此時より他人の補助を仰がざりしは父の資産辛ふとて余裕あるに至りしによる。ルトテルの大學にあるや、古典學及び中古哲學に得る所あり、而して父は之を法律家となさんとを望みしが、ルーテル

新教の無冠王 マルチン、ルーテル

自ら救のくに關して聊か思ふ所あり、且不慮の怪我をなまて大に其心を痛め、又親友の死を見て人生の無常を觀し、加之雷震に遇ひ、節首を俯して修道者とならんとを誓ひ、玄等の事情により、遂に意を決してアウガスチン派の修道院に入れり。

ルーテルの泛々たる一人の修道者のみ、されど又宗教上の疑問と憂苦とを抱きたる點に於て、凡庸修道者も其揆相同トからざりき。さればルーテルは救を得んが爲とて、聖ドミニツク、聖フランシスの如くに苦行をなし、他日敝履の如くに捨て、蛇蝎の如くに嫌ひ、中古の信仰を承認し、食を斷ち、眠を減トて衆徒と共に祈禱をなせしものから、毫も疑を晴らし、恐れを除くに由なかりき。要するに其の推理力と發明の才とは之を夢幻の如き空論に安んせしむるを許さず、フランシスやボナベンチユラやロヨラの如くに天使的人たるを得せざめざり、と見ゆ。若し夫れルーテルにして此の異色なくんば、徒らに修道院の中に朽果てた

るならん。

修道院は塵を避け、世を離れ、閑靜の別區なり。詩人は此處にありて、唯嗟に其の句を得べく、學者は此處にありて、容易く其の理を發明すべし。此に於てか、ルーテルの世の人々の修道院を愛すると、自ら尋常に異なるものありき。而してルーテルは如何、彼れは此處にありて、平和を求むるが爲めに苦心し、苦心に苦心を累ねて、神と和ぐべき途なきに失望せり。その眞理に對して、飢渴煩悶せし様は、恰もミランのアウガスチンと相似たるものありき。ルーテルは哲學者にあらざり！も、自稱哲學者の望んで達し得ざる哲理を求むるに急なり。而して其の胸臆はプラトールやポーテヤスを讀むほどに未だ寛廣ならず、儀式に泥み、律法に拘はり、時流の弊習を脱する能はずして自ら苦しみたる點に於ては、以てマルソのソールに比すべし。

ルーテルの友にスタウピツといふものあり、親切にして且つ思慮ある

人なり、一日來りて諄々聖書を讀むとを勸む。蓋し此頃の修道者と稱するもの決えて聖書を讀まざりてにあらざりしもその之れを讀むや、中古的の眼鏡を以てするが故に、真理の光紙底に韃まれ、悔改を以て難行と解する類のと多かりしなり。獨りルーテルは此の勸告に従ひ、活眼を開ひて之を讀み、パウルの所謂の義人は信仰によりて活くべしとの詞に至りて大いに感激せ、行ひも善し、されど信仰は神の賜なり、行ひは最善の人を以てするも尙得且つ仲保者より見れば、不完全なる所あり、獨り信仰は神の愛より發して無限のもの、無限の喜びなるを悟了せり。ルーテルは辛ふとて中古的思想を脱ぎ、新たなる希望漸く起りて愉快またいふべからず、今日まで鬱鬱沈滞にして局促拘々たりし様に引き替へて、神聖の熱火、焰々として其の胸中に燃え上れり。此時に方りてルーテルの技倆と徳性とは漸く世人の知る所となり、一千五百〇九年ツキツニーの撰擧公フレデリック、ルーテルを擧げてその新たに

ツテンブルグに建設せし大學の教授となせり。ルーテル此處にありて大いに學生の人望を博し、漸く社會的人となり、頗る活氣ある説教をなして多数の耳目を聳動せり。されどルーテルは身自ら尙得一箇の修道者にして、毫も修道院を攻撃し、法王を非難するの意あるとなく、その權威に従順なるは一箇の好加特力教徒と稱するに耻づるものあらず。只ルーテルは中古なるものを惡み、その幽靈的、葬祭的、儀式的、化石的なるを嫌へり。而して一方には世人舉ルーテルの徳望を慕ひ、其の情愛に感ず、尋常修道者に對すると自ら待遇を異にせり。時の法王レナ第十世偶々巨額の金を要す。元來法王は巨額の歳入ありしかども、歡樂遊興に費す所、彫刻繪畫を集むるが爲めに要する所決して尠きにあらず、加ふるに法王はその名譽の爲めに聖彼得會堂の再築を落成せんと志あり、而して何れの所に此財を求めん、當時神品僧尼の徒漸く法王の課税重きに苦しみ、王侯もまたその限りなき要求に

飽きたり。法王即ち暗黒時代の舊習を再興し、赦罪券を賣るととなし、使僧を四方に派遣せり。

サキツニーに至りし使僧をテチエルといふ、ドミニカン派に屬し、粗野暴慢禮節の何たるを知らざる一俗漢なり(羅馬派教徒は博學に稱す)ルーテル之れを忌むと甚だし。これ蓋し必ずしもその粗暴無禮なるが爲めにあらず、その帯びたる使命が神と宗教の威嚴を害するを以てなり。此を以てルーテル憤然として起ち、テチエル及びテチエルの行爲を非難し、罪を赦すは獨り神にあり、然るを人にして之を赦さんとす、その身たとひ法王なりといへども、これ僭越の甚だきものなりと痛論せり。されど當時の人々は償金の功を迷信し、懺悔したる後ちろの罪を除かれんには、是非とも神の代表者たる教會の赦免を受けんが爲めに若干の金を献つて神聖の費用を供給せざるべからずと思へり。ルーテルの干言万語を以てするも、此の原理を覆さざる限りは畢竟徒勞のみ。此の原理

或は恕すべきものあらん、然れども、此の赦罪券は之れを買ふ人民も、之を賣る使僧も、さては之れを准允せし法王も等しく私慾の爲めに濫用せし形迹あるを如何せん。されど人民は尙ほ罪の恐るべきを知り、靈魂の亡びんと憂へたるものどもならず。此を以てルーテルは赦罪券に反對して神に義とせらるゝの眞理を發揮せんが爲め、聖書を學び、アウガスチンを研究し、一千五百十七年十月三十一日初めて拉丁語を以て、其の自得の眞理を公けにせり。これ即ち有名なる九十五ヶ條なり。其略に云く、羅馬法王は神の赦免を傳達するの外罪を赦すの權利なし。法王の赦すを得る懲罰とては法王自ら課したるものか、若しくハ、カノンの課したるもの之れのみ。赦免は眞の悔改の兆にして、全く基督の功績によるとなり……教會の眞正の財寶といふは榮光の福音と基督の恵みあるのみと。こは勿論法王を攻撃したるにもあらず、羅馬教會を攻撃したるにもあらず、さて

は赦罪券を攻撃したるにもあらず、只赦罪券の濫用を攻撃したるなれども、其の精神は徹頭徹尾新教的なり、さて此の九十五ヶ條は、ウヰツデンプルツ會堂の門扉に貼付せられ、北獨逸を震慄せしめたるのみならず、また法王の眼に觸れたり、法王は其の趣意のある所を看破し得ざりとも、その論鋒に感激してルーテルの奇才を稱したりといふ。而して之れを讀みたるものは學生たると庶民たるとに論なく、恰かもメンツェステの火を点せられ、如き有様となり、新發明の印刷器械また其の流布を助け、僅々二週日にえて獨逸語の翻譯成り、遠近上下の嫌ひなく、行き亘らぬ限なきに至れり。此の九十五ヶ條何が爲めに斯る勢力ありしかいふまでもなく、其の能く舊套を蟬脱し、死文を蹂躪して活氣天を衝き、趣味海よりも深きものありしによらずんばあらず。余輩は敢て彼れの説を斬新といはし、所謂の信仰によりて義とせられ、聖恩によりて救ひに入るの眞理は決して斬新のものにはあらで、全くパウロも説き、

アウガスチンも説きしものなればなり。而してルーテルの功、此の二人に遜色なきものは、能く忘れたるものを警醒したるによる。而して此の眞理即ち宗教改革の根源なりき。或ひは云く、ルーテルが宗教改革を企てたるは、カテリナ、ホエと結婚の希望止み難かりしが爲なりと、是ルーテルを誣ふるの甚だしきものなり。或ひは云く、宗教改革は人智の進歩社會の趨勢相結んで羅馬を惡み、法王の腐敗を憤ほり、修道者風と時世とに激昂して起りし一種の闘戰に過ぎざるなりと。これ第二原因のみ。第一原因は即ち神學上の議論にありて存す。彼れ豈宗派の爲めに争ひ、法王を怨嫉するが爲めに運動するが如き小器ならんや。法王レオ第十世は最初左程のともせざりしに、漸く形勢の赴むく所を見て大いに驚き、遂に一人の學者をしてルーテルと對論せしむ。されどルーテルの確信は岩の上に立てられし家なり。全世界のカルヂナルが力を併せて之れに逆ふども、豈一步をたも移すものならんや。ルーテ

ルは全世界の教會を敵手として戦ふの決心あり一なり然るを一人の曲學者に屈せんや。

斯くてルーテルはライプチヒなる撰擧公の殿中に於て當時第一流の對論家と閉てへたるエツクと議論を交へたり。獨國從來斯る神學者斯る大家の對論ありたるとなければ全國の人民悉くその耳を聳て手に汗握りてその勝敗に注意せり元來エツクは名譽よりいふも學力よりいふも議論の手並よりいふも共にルーテルに優れり而してルーテルが之れに對せし利器は信仰なり天才なり辨舌なり彼れは聖書を楯として此の利器を活用せり彼れは法王の權威を恃まざる代りに法王に優りたる聖書の權威を恃めり。

二人の對論は果してルーテルの勝利に歸せりされど加特力教徒等は此後ち力を併せてルーテルを攻撃して曰く我等も亦聖書を承認す聖書の貴きはアウガステンにも優りトマス、アクイナスにも優り爲政者

にも優れりされど聖書を解釋するものは誰ぞや農夫か婦女か商人か貴族か聖書は天啓によるといへども難解の文多く矛盾して見ゆる所あり學者いざ知らず尋常人の爲めには嚴緘せられたる書なり之れを解釋するもの獨り教會あるのみ所謂教會の教師のとなり靈の主領に忠實にして信仰最も深く學問最も高き聖職なり聖書は如何に明白と思はるゝ箇所にて之れを解すると一に教會の權威に準據せざるべからず。足下の所謂道理は我等之れを取らず蓋し道理は物を混と且つ事を誤ればなり教會のいふ所は眞實なり衆論のある所は最上の則なり(是れ即ち法上の獨斷を以て道理)且つや聖書は只僧侶によりてのみ解釋せらるべきものなるか故に若し普通人民の手にある時は之れを安全といふべからず故に我等僧侶は普通人民をして之れを所持せしめず彼等これによりて我等の權威を侵すに至り迷信を長トて我等を侮るに至るべければなり」と。

ルイテル之れに對して辨トて曰く「人生の燈臺を奪ひ、天國の嚮道者を取り去り、最も貴重にして最も尊嚴なるものを秘して知らしめず、試みと死に苦しむ靈魂の慰藉を壘斷して、尤も明白なる眞理を拒み、權勢私慾を擅にせんとするは何事ぞ。暴戾殘虐これより甚だしきはなぞ。且や足下等の權威は悉く相同しきにあらず、アウガスタンの論據はペラギアスと同一からず、ベルナルドはアベラルドと同一からず、トマス、アクィナスはゼン、スコラスと同之からず、足下等の大會議はその決議常に相同しきか。我等誰をか信せん。若し夫れ法王といはば、人を異にし、時を異にするに隨ふて其の意見また相同しからざるは如何。グレゴリー第一世はグレゴリー第七世の判決に對して何ぞかいはん。實に聖書は初代教會の一般人民に遺せる賜物なり。聖書は地球上すべての國民すべての種族の共有財産にして、子々孫々遺傳して審判の日に至るものなり。聖書は流布せらるべきもの何人にも讀まるべきもの人々箇々に解

釋すべきものたり。蓋し人々皆救はるべき靈魂を有し、而して靈魂得るの貴ふべきものを私慾固陋なる僧侶の手に任ずるを肯んせざればなり。或ひは農夫或ひは婦女或ひは他の平信徒の手より聖書を取り去らんとするは、これその靈魂を陰鬱なる牢獄に投ずるに等し。足下等自稱萬民の嚮道者たるもの、錙銖の利害の爲めに道理を打破せんとするか。道理なき時は人民將た何を嚮道と頼むべき。足下等は道理の福音によりて啓發せらるるを妨ぐるものなり。足下等は傳説によりて道理を壓せんとするものなり。あゝ替者の手引きする替者上、眞理の光を隠す僧侶等上、憐れむべきバルサザムの徒、傳説と權威に執着する黨人、俗僧等よ、足下等果えて萬民の爲めの廣大無邊なる贖ひと、基督の血の救ひとを排斥せんとするか。足下等は彼等の奮起せんとを恐るゝが爲めに、靈魂及び肉體の亡びんとするをも空しく看過して、尙ほ忍ぶとを得るか。斯くて人に對し、神に對して犯せる罪は極めて大いなるに思ひ至らざ

るか。足下等人民の迷信に訴へて僅かに姑息に安んずるを得といへども、地獄に陥るを避くるの道なきを如何せんとするや。若し夫れ聖書にして何人にも之れを所持せしめ、人々各々、其の智見に随ふて箇々に之れを解釋し、たとへば使徒時代に於けるが如く、靈性上の自由復興する時は、人民即ち中古の桎梏を脱し、其の權威と尊嚴に還り、良心の聲に應じ、確信を守りて基督教の命ずる道徳を行ひ、人よりも神に従ひ、堅く福音の約束を信じて、迫害も止み、詐欺も止み、壓制も止み、あらゆる失望の原因みな盡滅して、人民愈々發達すべきなり」と。

「もく、此の自判論なる歐洲に於て之れを主張せたるものは、ルーテルを以て初めとなじ、ルーテルを以て主將とするを同時に又尤も大膽に、最も斬新の説たり。此に於てか聞くもの皆此の説に傾動し、改革運動に非常の聲援を與へたり。蓋しこれによりて宗教自由の基礎成り、教理を異にし、禮拜を殊にするものといへども、尚ほ且つ手を執りて互ひに

兄弟よと稱するを得ればなり。素とより此説は宗派分立を蒸成するの恐れなしとせずといへども、尚ほ且つ聖書の價值と緊要の教理に於ては、戻らず違はず、ミルトンとノッテス、ロツツとバツストル、グロムウエルトと女王エリザベス、ベーコンとベン、バトレルとウエスレー、ジョンナサンエドワードとチャニンングは一堂の中に會きて相懇談するを得べきなり。

且つや此の自判論は信仰の教義、聖書の權威と共に宗教改革の三大要素にして、また實に舊教と新教との間に於ける一大有力の區界線たり。若し夫れルーテルの所謂神の恵みはアウガスチンも説きし所、聖書は最高の權利なりとの論に至りては、教會從來の聖父もまた之れを承認せり。而して聖書に自由の解釋判定を下すの一點に至りては、舊教僧侶の中、一人だに之れを唱へたるものあるとなし。ルーテル之れによりて新教の旗幟を樹て、舊教徒之れによりてルーテルを惡めり。

ルーテルはサキソニの撰擧公フレデリック保護の下にありて、法王の怒りを免かれ、破竹の勢を以て、廢棄壞滅の事業に着手せり。事の詳細に至りては、今之れを列擧すると能はず。ルーテルは先づ新閣を起さん。が爲に舊城を破壊し、醉酒者(近頃増したる飲)發賣者、好色者(カテリナはたれ)暴慢者、無神論者、サマソンの子よと呼ばれたれも、又自ら法王を嘲りて、基督の敵なりといへり。法王いひて、黙すべき、一千五百二十一年グレゴリーやクレメンツの得物を打ち振りて向ひ來り、かばルーテル笑つて之れに對し、群衆の眼前にありて、法王の宣告を焼き捨て、全く羅馬とその關係を絶ちて、永久の戰鬪を挑み、彌撒祭式を撤し、神壇を壞ち、絞羅の僧服を寸裂し、僧院を毀ちて、女僧カテリナ、ボラと婚し、家庭を祈禱讚美の樂園となし、自ら讚美歌を作りて、一般信徒の爲めに供し、禮拜の式茲に至りて、敬虔となり、講壇の説教茲に至りて、活氣を生じたり。ルーテルは情意よりも、推理を重んじ、迷信を排し、罪惡を責め、新眞理の

基礎に立ちて、熱信を獎勵したると同時に、また全く過去の傳説の臭味を脱却せざる點なきに、あらず、其化肉説を信じ、教會の休日を守りたるが如きこれなり。然れども、またルーテルは聖書の普及を希望し、自ら筆を執て之れを獨逸語に翻譯し、殆んど獨力を以て之れを成功せ、彼のチンマールの聖書の英語に於けるが如く、國語の標準となりて、大いにその紊亂せるを正したり。ルーテルの勤勞は、管に之れに止まらず、禮拜式、文、信仰、個條、讚美歌を起草し、一年間の著書、一百八十三部に上り、まゝあり。其他基督教諸國に交通をなし、サキソニー人の爲めに、政事上の相談を受けたるが如きは、誠にゼロームとクリフストムとアウガスチンとを一身に集めたりとやいはん、眞に新教の法王たる觀ありき。

一千五百二十一年、ルーテルはチャールズ第五世の召に遇ふて、ヴライムスの大會に赴けり。會は皇帝自ら司る所にして、議員には監督あり、諸侯あり、カルチナルあり、法王代理あり、將校あり。ルーテルの知友等はそ

の危険を憂へて、此行を止めたれども、毫も屈する色なく、皇帝の使者よ
 た之を諭したるに、悪魔の数はヴナルムスの屋瓦の如く、多くとも我れ
 必ず行かんとして、勇氣凜然四月十六日を以て安着す。對審當日の模様は
 今古各國の畫工詩人歴史家等々しく、意匠を盡して之れを描出し、歴史
 上比類少なき壯觀と稱せらる。ルーテル多衆を睥睨して云く、諸君聖書
 に基づける議論によりて余を服するにあらずんば、余は一步も之を諸
 君に譲るとなかるべき、……余茲に立てり、余たまた他のせん方なし、
 神は我れを助け給ふ、アーメン。とその勇は多くの殉教者の間にも、その
 比多からず、彼れは肉を殺して、靈を殺す能はざるものを恐れず、その正
 義によりて立つは、恰も大磐石の動かざるが如し。此に於てか途に全勝
 を得たり、されど皇帝は詔を發せてルーテルの説を稱譽するを禁じ、且
 つ何人にて、ルーテルを自宅に宿らしむるを許さず、又ルーテルと面
 談するものは、直ちに之を罰すべきとを命じたれば、ルーテルが無二の

保護者サキソニ候フレデリック大いに之を憂へ、ルーテルを歸途に
 要してワルテベルグに止まらしむ。ルーテル此にあると一年、新約聖書
 の翻譯は此間に成りたるなり。

ルーテルの事業はその生涯の間に完成せざりき、而して其の行ひに過
 ちあり、その經歷に人生の弱点あり、彼れは希臘羅馬の繪畫彫刻を賤ま
 み異端の風、驕奢の俗となし、異説をなすものと交際を絶ち、反對論者に
 回答するに時として、非常の激語を用ひしが如きは、誤謬ならずとい
 ふを得ず。要するにルーテルは磨き上げし金剛石にはあらで、今切り出
 せしばかりの見影石なり、以て粧飾となすべからざるも、以て堅固なる
 基礎となすべし。ルーテルは堅信不拔、豪膽にして、權勢毀譽を恐れず、熱
 心一意眞理を普及せんとて、其の身命を犠牲となまされたればなり。ルーテ
 ルの反對論者いへるとあり、俗人は琴を已れの意の儘に弾く如く、ルー
 テルは獨逸國人を己れの意の如くに導けりと、ルーテルが獨逸國人の

精神上に勢力ありしと以て知るべきなり。ルーテルの晩年には記すべき程の異事あるとなし。彼れは困苦危険忍耐愛憎悲喜憂悶失望を経て終に凱歌を高唱し、一千五百四十六年、齡六十三の時、病ひを得て、その故郷に歿す。余輩は信ず、ルーテルが改革の大業に就て、人類あらん限り、その功徳を感謝し、其の慶に頼るべしと。又余輩は信ず、新派の勃興も異端の跋扈も、學術の進歩も、エビキエリアンの思想の増長も、ルーテルの功業を滅し、ルーテルの遺旨を妨ぐるに由なきを。

軍人的宗教家

イグナシアス、ロヨラ

(Ignatius Loyola)

イグナシアス、ロヨラは「セスイット」派の創立者なり。其の族名をドン、イニゴ、ロベッツ、ツレカルドといふ。一千四百九十一年を以て、西班牙ビスケーのギブスコア縣ロヨラ城に生る。幼年の頃軍人となるの目的を以て軍學を修然、又フェルチナンド、イサヘラの朝に仕へて禮法を學び、二者ともに大いに進む。ロヨラまた性質想像に富み、且つ多血性の人なりければ、軍學の傍ら詩を學べり。年三十の時、佛軍の來寇するに會ひ、ロヨラ即ち命を受けてパンベルナを守る。其間功を立つると、勢からず城陥るの日、流丸に中りて足を傷く。已にして療治を施したれども、關節全く合はず、兩足自ら平均を失ふの恐れありければ、再度の療治に着手し、屏居日を曠おすると久し。此間ロヨラは無聊を慰めんとして、軍學の書を求めたるに却て聖徒傳及び他の宗教書を得たり。ロヨラ非常の熱心を以

軍人的宗教家

イグナシアス、ロヨラ

て之を讀破し深く諸聖父の熱心に服し、又其の辛苦に感ずる所あり之れより思想も感情も自ら新生面に向ひ從來軍人的の熱心を移して之を宗教上に用ふるに至れり。

ロヨラの病床より起つや、世の名譽と利慾を抛ち、全く神に事へて其身を聖別せんとの決心をなせり。されど此の決心をなすまでには随分苦心をなじき、彼れは軍功を思ふの情切なり、加ふるに最愛の妻あり、彼れの熱心篤ありしといへども、是等の羈絆また甚だ弱しといふべからず。彼れは頓て是等の障礙に克ち、一千五百二十二年三月二十四日といへるおモンセラワットのマリヤ會堂に詣り、祈禱と斷食を以て夜を徹し、神壇に手を掛けて、軍人的の作法により、身をマリヤに獻げぬ、此時また既足エルサレムに參詣するの誓を立て、爾來種々の難行に其身を苦め、結果は身体の健康を損ひ、殆んど生命も危ふき程に至りしとあり。ロヨラが讀みし歴史の中にて、其の最も心を動かしたるは、聖フランシ

ス及び聖ドミニツグの傳なり。ロヨラが難行苦行を冒すに至りしも、一は之れに勵まされたるなり。斯くてエルサレム參詣の途に上り、暫らく羅馬に滞在して法王の祝福を得たる末、ベニスに往き、サイプレスよりパレスマインに進めり。一千五百二十三年九月四日エルサレムに到着す、此時その服裝の卑しかりしと、多くの參詣者の中にも、其類を見るべからざる程なりといふ。ロヨラはあらゆる聖地聖蹟に禮拜を遂げ、至る所其の主任者に面して、近傍の異教者を教化したしと申込たれども、皆許されず、却ていと鷹揚なる返答に遇ひ、歐州に還るべしとの嚴命を受くるに至れり。凡そ人傑の傳記を讀み、その感化の遠く後世に及ぶものを見るに、大抵皆一度は失敗せしものにあらざるはなし。而して此の失敗こそ、却て他日の大功を誘致する所以なり。今夫れロヨラの如きも猶太人若しくは土耳其人の教化に従事し、之れが爲めにその根氣を費したらんには、彼

れの名譽は直ちに消へ、且つバレスマインの外に出づるに由なかりえならん。

ロヨラは參詣を果して故郷に還りたる後、宗教上の事業を企つるの念禁ト難く、其志燃ゆるが如くなりしも、自ら顧りみれば、その學植甚だ深しといふべからず、此を以て年已に三十三を重ねたる身を以てバルセロナに赴き、吃々文法の初歩を學び、熱心と勉強を以て今日までの損失を回復せんとせり。ロヨラ此地にありて修道院の改革を企てたるに、事成らずきて逐はれ、アルカラに往きて近頃カルヂナル、ヘメーテスの設立したる大學校に入り、一千五百二十七年まで在學す、此間その修習したる學科は論理、物理、神學の三科なりしが、晩學のとなればとて他人にありては許多の日月を要すべきものを一氣に呵成せんとて、非常の勉強をなせり。此を以て自から考察練習の暇に乏しく、万般の智識雜然として、一も精到なると能はず、一貫の主義あるにあらざれば、應用の力

自ら鈍く、徒らに博聞を以て終らんとす、ロヨラ辛ふとて此に氣付きたりければ、大いに實用の方に心掛け、尙ほ苦學を廢せず、且つ思ふやう我が周圍にある人と交際えて實用の才を養ふと、一の良策なるべし。然るに或時アルカラに於て演説したる結果、端なくも學校評議員の忌諱に觸れ、四十二日間の禁獄に處せられ、神學校を卒業するまで四年の間は、全く演説を禁止すとの命令を受けぬ。又當時二三の同輩と申合せ、奇異の服装を着けたりしが、之れをも脱すべしとの命令を受けたり。ロヨラはアルカラを去りてサラマンカに移るに及び、説教をなして再び懲罰委員に附せられ、禁獄に遇ひて非常の虐待を受けたる末、其の同志どもに演説禁止を命せられたり。斯る次第にてロヨラは常に上に立つものゝ忌諱に觸れたりしが、其實は説教に不都合ありしが爲めにあらずして、其の地位未だ之を許さざりしなり。即ち彼れは尙ほ一箇の平信徒たりしなり。

ロヨラは漸く自國にありて其望を失ひたりしがば安全にして寛大な處もあれかしと希望し、遂に巴理に赴むくととなり。一千五百二十八年の二月に至りて到着せり。當時ロヨラ己に囊中乏しきを告げ、僅かに諸友の親切に助けられて、此に至るを得たり。然るに同窓の者の中に悪漢ありて、其の少許の資財をさへ奪ひとりたりしかば、ロヨラ愈々究し乞食をなすの外、其身を支ふるの途なき慘況に陥れり。されどロヨラの文學に對する熱心は終始渝るとなく、徳風の感化また、漸く同志をさへ起すに至り、レメント第七世の嫌疑を惹き起したるとあれども、その大事とならずして止みぬ。ロヨラ此間に在りて學資を得んが爲めに諸方を遍歴せし結果は不幸の幸となりて大いにその觀察力を養ひ、且つ人と交際するの技術を練習せり。

ロヨラは斯る忍耐を経て漸く三年の學科を終へ、僅かに學士の稱號を許され、更に進んで専ら神學の研究に従事し、一千五百三十四年遂に一

の新派を起さんとの大計畫を立てるに至れり。ロヨラ當時の地位を以てすれば殆んど無謀のといふべく、且つ到底成功の望みなき自論見なりき。且彼れは地位あり、學識あるの朋友なし、いかで其の目的を達し得べけん。是れ畢竟架空の唇氣樓ならんと見へたりき。一千五百三十四年八月十五日モントマルトルの會堂に會せしもの七人あり、何れも皆無名無位の人々にして、或者は白面の書生に過ぎず、或者は極めて貧し、而して此七人は一種特創の信條を發表せんとの計畫を立てし。大膽なる。彼等は先づ祈禱と斷食を以て之れが準備を整へ、此の會堂の地下なる一室に於て七人の中の一人ラ、フェーブルと稱して近頃漸く按手禮を受けたるもの、司式の下に晚餐禮を舉行せり。此に於て一同は嚴肅の式を以てエルサレムに參詣し、東洋の異教徒を教化し、且つ參拜をなすに必要のもの、外は一切その所有物を捨つべきを誓約し、若し不幸に於て此の希望を達するに能はず、新派を起すに由なきことならば、

法王の足下に拜伏して其の命を受け、其の器械となりて課せらるゝほどの任務は何事にて、之を果すべしと契約せり。此の七人の中にはフランシス、ザビエルもあり、ザビエルは西班牙の人にしてロヨラより弱きと十五年なり。彼れは初めより熱心なるロヨラの教友にして、セスイット派中に鏘々の人なるとは讀者の夙に熟知せらるゝが如し。

モントマルトル地下の一室に於て微かなる會合を催したる少數の團體は速に發達してセスイット派と稱する一大教派となり、基督敎諸國を席捲し、朝野を感化せし勢、百般人事に及ばざる影響決して尋常なりといふべからず。彼等元來の目的は異教徒を化せんといふにあり、其羅馬法王を畏敬せしが如きは素とよりイグナシアスが同志を策勵せんとせし本旨にあらず。またロヨラは最初宗教的熱心の原動力たりし軍人的の氣象尙存したりければ、一新派を立んには是非とも最少の報酬に甘んじて最多の犠牲を献さるべからずとなし、生命をすら物の數

ともせざりき。斯くてロヨラは同志結合の爲とて默念懺悔、自省祈禱等の規則を定め更に此派特別の祭日とて結約紀念日を置き、其の同志の用意整おを待つ間に、自ら佛國にありてルーラル及びスイングリの教理を鎮歴する計畫を廻らすに余念なかりき。

ロヨラは一應故郷に歸りたる末、ベニスに赴むきぬ。こは其の同志者の約束に随ひ、參拜の目的を果さんとてなり。時に一千五百三十五年の終りなりき。

彼等最初の計畫によれば、先づ羅馬に赴かんとするにあり。而してイグナシアスの羅馬に至るや、ピートル、チャーチスといふものゝ信用を得たり。チャーチスは有名なる西班牙人にしてチャールズ第五世に仕へ法王に代りてヘンリー八世とアラゴンのカザリンとの結婚を周旋したる人なり。チャーチス先づ法王バウル第三世に謁きてイグナシアスを紹介したりしが、法王その敎説を嘉し、其の計畫を賛成せり。然るにイグナシ

アス、バレンスタインに向つて出發せんとするに方り、計らざるも土耳其戦争の起るに會して果さず、一千五百三十七年の末に至り、其同志をヴェンザに會し、説て曰く、今やバレンスタインに至るの途全く閉塞す、我等如何ともするとなし、宜しく誓約の他の部分を決行し、羅馬法王に對して忠勤を勵むべしと。此時その人数は増えて九人となりたりき。此に於てのイグナシアス即ちその中の二人を携へて羅馬に歸り、その他のものは思ひく離散して以太利中有名なる諸學校に赴むき信者を募るに盡力せり。彼等は自ら稱して耶穌會社員といひ且つ嚴格小此の新派の規律を遵奉せり。

イグナシアスの羅馬にあるや、大に他の奨勵を受けて、此の新派を擴張し、其の規模を大いにするの止むを得ざるに至れり。依て其の同志を悉く呼び還へし、之を羅馬に會せよめぬ。彼等のウエニスにあるや、堅く清貧と貞潔の二徳を守れり、而して今や亦之れに加ふるに従順の徳を以

てし、無限權を有せる總理を撰ぶととなり。且つ基督の代理者たる法王に對して、補助を受けず、報賞を受けざるも、斷つて義務を守らんとを世に公言するに至れり。此に於てカロヨラ法王に「出願して、此の一派の公認を乞ひしに、意外の障礙も起りたれを問もなく皆拂ひ除かれ、且つカロヨラが曩きにアルカラ及びサラマンカ等に於て受けたる異教の嫌疑は此時再燃して、稍不利の模様を顯はし來り迫害甚だ太だかりしかども法庭の審問その無罪を宣告するに方りては、却て其の名譽を倍するの媒となれり。此に於て乎法王は「カルヂナル」の中にて勢力ありし一人が異議を唱ふるにも拘はらず、一千五百四十年九月二十七日、斷然宣言を下してイグナシアス派を公認せり。其の門徒と稱するは此時尙ほ依然として九人に過ぎざりき。その中三人は以太利にあらず、サビエルとロドリゲスとは印度にあり、フェーブルはゲラームスの大會にありたればなり、此を以て總理撰任の時に居合はしたるものとて

はロヨラを合せて僅々六人なりき。ロヨラの全員一致を以て總理に推されしも、彼れ自らは此の決議に對て心を痛め、第二の集會あるまでは其の職に就かんとて固く之を辭せり。されど其の師僧の勸めに遇ふて余議なく之を諾し、一千五百四十一年四月二十二日聖バケル會堂に於て結社の典を擧ぐ。此時イグナシアスの誓約は直接に法王に對して從順を表せんといふにありたれども、其の他の人々は皆専ら總理に對して從順を表すべしといふにありき。此に於てかその組織は軍隊組織となり總理の命とあらば部下悉く手足の如くに動きぬ。此の派の運動が常に合期して相齟齬せざりしもの其の原因實に茲にあり。法王の直ちに此の誓約を利用し、六人の門徒をして歐州の各部に出張せしめたり。而してイグナシアスは獨り羅馬に止まり、自省祈禱にその心腹を練り、公然宗教問題に對して講談をなすともあり、且つ慈善博愛の事業を起し、羅馬にある猶太人の傳道に心を用ぬ。罪を改め、婦人の

爲めに懺悔堂を建て、孤兒院を設け、閑あれば即ち此の派の憲法を制定するに從事せり。

此の憲法は默念と修業とを並行せしむるの主義に基づきて作りたるものにして、一方には默禱、自省、孤座を奨励すると同時に、また一方には同胞人類の教育及び洗淨に力を盡すべきを勸め、亦間斷なく説教し傳道し、異教徒と不信者を導び、監獄病院を訪問し、少年の德育及び智育に注意すべきを命令せり。此を以て彼れはまた苦行を勸めず、公けにも私にも虚飾がまざるとあるを許さず、また何種の團體に限らず、財産を所有するを禁じ、只學校だけは貧書生を教育するの資金として之れを許せり。且つ傳道者は其の須要を除き、一切俸給を受くるとを禁せり。蓋し思ふた、當時ルイテル派の勢ひ旭日の天に中するが如く、法王の常備軍たるフランシス派の如き、ドミニック派の如き、その精神何れも大いに弛緩して、全く物の用に立つべくもあらず、此間に立ちて獨り

活潑の運動を試み、法王の使者となりて、羅馬教を保護し、能く新教の進路を阻絶したるもの、只此の嚴格なる規律と憲法を有せしめ、スイット派ありたるのみ。夫れ古の修道者と稱するもの等は、世を遁れて寺院に入り、只管苦行を経て各自の救ひを全ふせんとを望み、毫も世に出で人を化せんとの望みあるとなし、獨り此の派は然らず、大いに力を教育に盡くし、能く時好を察して之れに適合せ、通常紳士の服を着け、寛ろぎて居り、自由に談話し、厭世的なる修道者の風を脱したり。その傳道の方法に至りては過失もあり、誤謬も亦尠からずといへども、熱心の点に於ては何人も之れに首肯せざるを得ず、彼等は畢竟目的の善良なる限り、手段を問はず、傳道の爲めとあらば政事にも干渉し、虚言をも憚らざりしかば、ゼスイット教徒の至る所、草生せずとの悪評をば被ひるに至れり。

却説これより更に當初の歴史に溯りて聊か記する所あらんとす。ゼス

イット派が公認を受け、第六年目にガンギア侯フランシス、ホルキア一校を建て、之れに付するにアマカラ及びサラマンカ等と同一の特権を以てし、即ちゼスイット教徒に與ふ。是れ同派最初の學校にして、校規はロヨラの設くる所なり。同年ロヨラ其の自克心の眞實なるを示し、且つ其の門徒は一般に名譽心を打ち捨てたるを証せんとて、勅命を發し、永遠の後まで種々の僧位に就き、且つ寺院を所有するを禁せられたる旨、法王に建言せり。此の禁令は實に此派に一種の特権を添へたるのみならず、また大いに一般人民をして此の派の無慾篤信を賞感せしむる媒介となり、且つ僧職を得、寺領を授からんとて奔走苦心するの時間及び勉強を他に利用するを得せしめたり。然るにイグナチウス生前の間ですら、忠實に此の旨趣を貫く能はざりしは誠に淺間しきともなかりき。

イグナチウスが大著に「靈性の鍛鍊」と題する書あり。此書はそのエルサ

レムより還り、後ち間もなく編述したるものと稱せらる。當時イグナ
 シアスは果えて此書を著すに堪へたる程の才能ありしや否やとは識
 者の共に疑ふ所にして或は偽作なるべしと思はるゝ點も尠からず。さ
 れど初代のセスイット教徒が之を認容したるも亦其の疑ひなき所に
 して、一千五百四十八年トレド大監督の如きは之れを禁止するが爲め
 に非常の困難を感せしとあり。ロヨラは又此の書によりて大いに自ら
 益する所あらんと欲し、法王パウル三世をして此の書の機能を吹聴
 せしめんが爲め自ら求めて賞讃と公認の辭を授かりたり。斯る次第に
 て此の書の著者と此の派の創立者とは一層世人の注意を惹くに至れ
 り。

已に第一着歩を成就せり。而してその進歩の迅速なりしとは古來幼稚
 なる團體に於て未曾有のものと稱せらる。そのフェララ及び伊太利の他
 の部分に傳はるやその本據たる西班牙に於てすら尙得充分の年所を

歴たるものにてはあらざりし程なり。一千五百四十八年に至りては、メ
 ッシナ、パレルモ等に立脚の地歩を定め、一千五百五十年にはバハリ
 アに入り、同年更にジュリアス三世の公認を受けて法王より巨額の
 補助金を受領せり。後ち二年羅馬に獨逸語の學校を起せしが當時欧州
 の各都市概ねセスイット派の學校のあらざる所なかりき。其の傳道者
 に至りては、印度、亞弗利加、米國に散布し、一千五百五十三年にはサイ
 ラス、コンスタンチノープル、エルサレムを占め、破竹の勢を以てアビシ
 ニア支那及び日本に侵入し、大學の教授、王宮貴族の師僧皆此派の人
 を以て滿すに至れり。佛國は此の派の傳道主義を疑ひ、最初はロヨラの
 熱心と盡力を以てせざる如何ともするに由なき姿なりしにその門徒
 等は尙ほも撓むとなく、且つ他方の成功に勵まざれて力を盡せしかば
 遂に其の望を達するに至れり。其の有名なるルーセント、ゼク大學を巴
 理に開設したるは實に一千五百六十四年二月にあり。

ロヨラは是等の成功を見てその満足一方ならず、勢力日に加はり、捷報續々として至るを目撃し、つゝ平安に羅馬に歿す時に一千五百六十六年七月三十一日なり。當時その會員の数は六千人以上なりしといふ。

長老主義の唱祖

ジョン、カルビン

(John Calvin)

カルビンは一千五百〇九年佛國のビールカルヂーに生る。ヘンリー八世が英王の位に即き、ルーテルがザッピタンベルグに初めて説教をなせしと同年なり。カルビンはルーテルの如く家系賤しからず、加ふるに質性幼よりして穎悟なりき。父即ち之れに法律學を學ばせんとて、テルラインク大學に入らしめ、尋でブルースに移り、至る所有名なる法律家及び學者の知遇を得たり。カルビン年二十初めて宗教を信し、爾後學問の方針、生涯の進路共に一變せり。カルビン元來顔色蒼白、眼光炯々、その沈着にして果敢なるは弱冠の人に似合はざる程なりき。年二十三の時、セチカの遺書數卷に註解を付きて之を出版せ、同年また獨逸の宗教改革派と交通を初めたるに間もなく佛國改革派の首領を以て目せらるゝに至れり。一千五百三十三年、新思想の中心、新流行の源泉たる巴理に赴

ひき信仰によりて義とせらるゝの教理を唱へ、爲め、ウルボン派の學者に忌まれ、ナバール女王の居城ボロに走りて多くの避難改革家と共に居住せり。己に於て佛國の各地に流寓したる末、遂に瑞士に至り、年二十六の時、有名なる「基督の組織」を著す。此の書はフランス第一世に奉獻する所にして、王が新教に改宗するを望むの意に出でたるなり。其後暫らく以太利に赴きて、フェララ侯爵夫人の許にあり、遂にゼチバに移りて、茲にその一大運動の端緒を解けり。

ゼチバはシロガルの頃にはアルロフロージ家に屬し、一箇の憲法を有せし自由國にして、其の狀恰かもサウオナローラが治めたるフロロニスに於けるが如くなりき。領主はサウオイ侯と稱え、十五世紀の頃には下民能く懐きたり、其の後人民之れに反き、サウオイ侯は一個の郡主となり了れり。此に於てか法律の廢立は一に二百人議院の手に皈し、別に六十人の議員ありて、外交上の事務を取扱へり。

ゼチバに於て初めて改革主義を唱進したるは佛蘭西の宣教師ゼアレと稱する高貴熱心の人なり。ゾアレ非常の反對と激昂を受け、之をいへども、其の結果は大いに見るべきものあり。已にしてカルビンのゼチバに至るや、寛大なるゾアレの愛敬を以て之を迎へたり。當時カルビン年僅かに三十八なりし、其の雷名已に一代に轟然たり。カルビンの此地に至るや、極めて貧而して、其身を終るまで清貧に甘んじ、死後その財産を取調へたるに僅か二百弗に過ぎざり。之といふ。カルビンは一つの教會を牧し、佳きまでに人の人望を得、その説教を聞くものは信仰を起さるはあかりき。是れ實に一千五百三十六年なり。然るに間もなく一つの障碍起れり。カルビンはアタバプチスト(洗禮は浸水體なることを主張し、小兒の時洗禮を受けしもの成長すれば再び洗禮を受くべしと主張する一派)の爲めに忌まれ、教理上の攻撃をさへ受けしを以て、止むを得ず、拉典語を以てゼチバ問答を著せり。カルビンまた國

民の道徳に注意すると深く其の罪惡を見ては余力を遣さるるに
 非難詰責を加へたり去れば市民の感情大いに激し黨派を樹て晩登禮
 に出席するを拒み果てはカルビンとフアレカを市外に追放するに
 至れり二人はこれよりベルンに越え去に市民之を入れず詮方なく雨
 と飢を冒してバヌルに到り更にストラスブルクに行きカルビンは
 三年の日月を此地に経過せり此間神學上の講義を以じ且つ註釋書を
 著述し、フオングリン其の他の改革者を職帯して「基督教の組織」を完結
 せり當時がルビの聖書の註釋書を作るに熱心なるは公共の禮拜式に
 出席するを廢するに至る。カルビンは
 カルビンは神學者なるも同時にまた百科の學に通じ其の嗜好よりい
 へば書室ばかりで著述に従事するは公會の説教をなすよりも適當な
 りしなり此時また諸方より至る通信頗る夥しく彼の忠告を受けん
 とするものなりカルビン明瞭會で外たす常に沈着平靜に以て熱心狂

暴の態ありたるとなり謂ふにカルビンは情に貧き智に富めり人
 ならんそのストラスブルク大會に聘せられて神學上の講義をなし又
 深く聖職の義理を研究せしは此時にかなりカルビン此處にありて平
 靜自ら處り大いに市民の尊敬を得たり。一
 一千五百三十九年フランクフルトに大會ありカルビン即ちストラ
 スブルクを代表して之れに出席すフランクフルトを面識せしは此の時
 を以て初めとなすされど尙ほ親交を結ぶに至らず翌年皇帝チャール
 ス五世がラシヤの大會を召集す(後ラチスボンに移す)新教舊教の親
 睦を計るに及び兩勇の友誼即ち成れり當時フランクフルト一派の主將
 にてモツクと相對しフランクフルトとオチメルとは共に平和を希望
 しカルチナルコンタリニの如きはいと打ち解けて改革派と共に信仰
 によりて義とせらるゝの教義を執る勢なりトにルイナルとカルビン
 とは眞理を調和して一致せんとするは宜しからず斯る運動は信を置

に思はずとなじ、兩派の協議途に纏らざりき當時その論點をせし所は即ち晩餐禮におり元來カルビンの晩餐禮に對する意見はルターとズイングリの間におりて晩餐の時に基督の肉体的臨在を認めず無論その席上には特別の神恩ありとなせども只之れを記號的に解釋せり。而して舊教派に於てはペレンガル以來此點に關して異論あるなれば、議論の分裂したるも亦自然の勢のみ、但し原罪及び自由意志に至りては何れもアウガスタンの説を執り又異論あるとなかばき信仰によりて義とせらるゝの教義に至りては甚だまき困難を生じ、化肉説に就ては兩派の衝突又如何ともするに由なかりき改革派は曰く化肉説は聖書に據あるとなじとされ、聖餐禮に關して大困難の生ずべきと勿論なれば最早懺悔の如き死者の爲めの彌撒の如き平信徒に聖爵を禁ずるが如き議題に進行するの必要なきに至れり、但し定理神學の大體に於ては舊教新教兩派の間世人の想像するほどの相違あるにあらず、神三

位一休基督の天職及び神性原罪自由意志神恩豫定説等の如きに至りてハ、トマス、アグイナスの定むる所カルビンと相戻る所なし、此を以て純然たる神學上の大議論に於て大問題と稱すべきは信仰によつて義とせらるゝと、及び晩餐禮の二論あるのみ、但し自由意志と豫定とに關しては舊教神學者の間に議論二派あり、彼のトレント大會の時にはカクイナス、ベルナルド等アウガスタンの説を奉じ、ゼスイト派のアベラルド、ライチス等ペラギアスの説を執りたり、而して現今羅馬教會に行はるゝ説は即ち後者にありとす、
 ラチスボン大會の終るや、カルビン人民の懇請默示を難しとてゼチバに還れり、人民等曰く、博學にして清廉なるカルビンは即ち我等が主の役者たらしめんと欲する人なりと、されどカルビンの還るや、喜んで還りしにはあらず、自らはストラスブルグに閑散の生涯を送ることを希望したるといへども、良心の聲獨り此の招聘を諾したるなり、一千五百四

十一年九月十三日全市湧くが如き歡呼の間に歸着す。人民等カールビンの究を憐れみ、上衣一領を贈れり。

同年カールビンはイデオレット、プリロー一名ブレンドを稱する寡婦と結婚す。プリローは都雅博覽高尚の婦人にして、九年の間琴瑟調和の喜びを盡せし後ち死去せり。プリローは教育と門閥に就てはルーツアルの妻カテリナ、ホラに優り如何なる細事といへども、只管所天の利害を思ふて、苟めにも反對せず。思ふに二人の交際は情愛にあらすして、敬意と友誼の爲に維持せられたるなるべし。さればこそカールビンはその婦人の美德に關て感服たるものは温順純潔抑損、忍耐及び其良人の須要に應じて熱心なると是れなりといひしなれ。カールビンのこれより又娶らす、その収入の少額にして之れに満足する人なかり。去が故なり。されどカールビンの本意は清貧にあり、巨額の報酬は望む所にあらず、爾後カールビンはセント、ペルナルドの如く、身を斷食と勤學に委し、身体疲弊するに至れり。

その「基督教の組織」の脱稿近きにあるや、眠食を廢すると數日數夜に涉りしも慣れでは左程にも感せず。さりといふ。亦カールビンは婢僕を備はせ、小き家に住ひて粗服を着し、著書の収益を徹せず。生涯の間喜んで受けたる贈物は、ヴァレンス侯より銀杯を授かりし時あるのみ。

ルーツアルハ一年四百五十フロリンの俸給を受けしも、著書の収益年額四百弗の之を辭して受けず。カールビンに至りては年俸五十弗に過ぎず。其他は家一棟、穀物十二俵、葡萄酒二樽の支給を受けたるのみ。當時歐洲に於ては、茶もなく、珈琲もなかり。かば、水に次ぐ飲料は只葡萄酒一品なり。去が如き。カールビンは非常に清廉の入にして、感情の爲先にその決斷と過るといふなく、沈着高雅落々として、決てホスエーが評せし如く、沈黙性の人にはあらず。又カールビンは威儀嚴肅の人なり。去が如き。宗教上の問題に就ては、婦女子も恐れずして之れと懇談すべし。又罪過は之を寬假せずといへば、所謂罪を惡んで人を惡むさる人なり。

ルビンの純潔はルイテルに優る所あり、曾てルイテルの如き粗暴の言を吐きしとなし。且カルビンはルイテルの如く強壯の人にあらず、天才また機變せず、改革者とて過激の所爲に出でたるともあるとなし。ルイテルは起ちカルビンは安座す。ルイテルは進攻しカルビンは守成す。ルイテルは寧ろ感情に訴へ、カルビンは智見に訴ふ。ルイテルは寧ろ雄辨にしてカルビンは論理家なり。ルイテルの改革主義は其の基礎廣けれど、カルビンは舊約書の觀測に基けり。ルイテルの警語は神恩にしてカルビンのは豫定なり。ルイテルの破壊しカルビンは建設す。ルイテルは綱を截り、カルビンは組織を立てたり。カルビンの政治主義は貴族政治にして教會も國家も數人の手によりて統治せられんことを望み、著述の中にも共和主義を主張したるものあるとなし。主權の盛に行はるる國は佛蘭西を初めとして、和蘭、蘇格蘭、亞米利加の如き、皆共和政體の益し、共和政治の如き、又すべての自由の如き、左の如き見受ぬる人間たる之れ

し、政者の政治を過重するの弊は、教會歴史より、而して神政主義を懐き、法王といへども、神の言に従ふ限りは靈性上統治の權を行ふも妨げなし。となし、教會はいつまでも靈性上原則の母たるべきを望めり。されどもまた宗教家の政治に携はり、政治家の宗教に干渉するを拒み、正しくアンセルム及びベケットの教義を執れり。但しカルビンはベケットの如く法律上の罪人となり、宗教家を庇蔭するを欲せず。政治上に關しては宗教家の之に手を着けざらんことを望めり。又カルビンは位階の存在を好まず、教會内にありても監督、副監督、牧師、執事、長等の存立を排斥し、説教をなすものは皆之を長老(プレスブテロ)と見做し、而してすべての長老は皆監督たり。又執事に至りては只貧人の爲めに周旋する會吏にして、説教せざるものなり。平信徒及び教役者各自の會合一つ宛を設け、教役者には破門の權を與へ、晩餐を司るを得せしむ。要するにカルビンは長老主義の設立と教會を去て世界の一大勢力たらまむるとに於ては、誠に

高尚の意思と希望あり一人なり。
 ガルビンはセネバの施政上にも一大勢力を有し、政府の爲めに道徳律を構成し、又府民の自由に制限を加へ、共和政体を變て貴族政治となし、一年兩會總會を開きて司法官を撰任す、而して此の總會の議事は一應二百人議院の討議を経たる問題ならざるべからず、又二百人議院の議事は一たび六十人議院の議したるものならざるべからず、更に六十人議院の議事は尙ほ少數人員より成れる一議院の議を経たるものならざるべからず、而して四人の司法官と十六人議院とは生殺の權を有し、國家公共の事業悉くその手にあり、其中最高の立法府は二百人議院にして、此中に宗教的の勢力の行はるゝと勢のならず。人若し晩登を禁せられたるにあらざりて之れを受けざるが如きとあらば、一年間の追放に處せらる。日曜日の禮拜式に出席せざる時は法律上の罪に問はるべく、軍人は一日二回祈禱の爲めに集會す、裁判官といへども宗教上の義

務を怠れ、直ちに處罰せらるべく、或左官屋根より落ちたる時、これは惡魔の所爲ならざるを得ずといひ、三日間禁獄せられしとあり。其他已が母に不孝なり、少女禁獄に遇ひて飲食を斷たれ、己が母を惡魔と呼び、農夫の子、笞刑を受け己が母を撲ち、一兒斬首せられ、姦通は死を以て罰せられ、詩篇と同様の譜を用ひて歌を謳ひ、一女笞たれ、又或女は男装をなせり、とて笞たれたるが如き、杖擧に違あらず、且つ新婦も帽子に花笠を着くると許さず、博奕をなせざるものは頭手架に掛けらるべく、骨牌遊び將棊何れも博奕を以て罰せらる、邪義を唱ふるものは死に處せらるべく、六十年の間に巫祝の徒、火刑に遇ひしもの百五十人あり、といふ。その他法律の制裁は衣服私行の末にまで及び、無邪氣なる遊興の禁せられたるもの多く、祭禮演劇の如きも禁止せられ、人民破門を恐るゝと中古に異なるものあらざりき。
 カルビンは何事にも儀式的なるを嫌ひ、祭日を全廢し、只クリスマス

のみ存し、曾て安息日廢止論者なりとの嫌疑をさへ被りしとあり。されど安息日を守るの嚴なるは實に清教徒と異なるものあらざりなり。又カルビンは禮拜式の時、詩篇を歌ふとは、前例によりたれども、チルガを用ひず、祭壇も十字架も欄干も悉く之を取り拂ひ、教會は牧師の出席せし時を除き、平日は閉鎖して入らしめず、美術殊に美術的音樂を排斥し、會衆一同をして讚美歌を歌はしむるの風を起せり。カルビンは技術的説教若しくは演説術を輕め、其の説教は悉く臨時のものにして曾て草稿を起せしとなし。さりて説教を輕んせしにあらざ、否却て舊教會の儀式に重きを置くに對して頗る説教を重んじ、之を教會禮拜式の要部となせたり。而て之れが爲めに教會の禮拜式冷淡偏理となり。之傾きありとせば、カルビンも亦其の罪を負はざるべからず。洗禮、晩餐の二典に關しては何れも之を記號的に解釋したりといへども、之を貴ぶとは敢て舊教徒に譲らず、又破門を教會の兵器となし信者

を懲戒するが爲めに之を用ひたりといへども、さりて柔和と愛とを欠かず、人心を見るに一に神にありとなせり。此を以て破門は永遠の破門にあらず、破門せられしものといへども尙ほ神の手にあるとを承認せり。而して此の破門の權利なるものは牧師と會衆同意の上にて執行し得るものとす。ルーテル派にありては牧師之を破門するの權あり、而てカルビンの長老主義に於て牧師專有の權といふは、晩餐洗禮の二典を執行するにあり、教會の有する權利は晩餐を禁ずると破門をなすと之れなり。カルビンは亦政府に與ふるに長老を撰ぶの權利と牧師撰舉を批准するの權利とを以て、自ら政府と教會との聯絡を介し且つ毎週木曜日に牧師長老會議を開きて政府員の臨席を求め、市民の品行を監査せり。されば此の會議は政府の支配する所に於て、人に懲戒を命ずるの權利を有せず、その司會者は政府員なれども、教會長老たるの資格を以てするとなり。是等の政教混同の嫌ひなきにあらずといへど

も、時勢の必要に應じて茲に至りたるなり。決して萬世萬國の規範に
らず。元來加特力教徒等は國家を教會の下に置くの弊あり、而して改革
者等は皆之れに反動せり。又カルビンの教會の治府を設けて僧侶の專
恣傲慢に流るゝを防ぎ、信仰問答を作りて教會の信仰を統一せんとし
たり。但し神學上最後の裁判權を政府に與へて大會の權利を殺きたる
は、危險の極といはざるべからず。

余輩は上來聊か立法者、改革者としてのカルビンを觀察せり。更に一步
を進めて神學者たるのカルビンを論せざるべからず。抑もカルビンの
教會歴史にありて重きをなせるは、その神學者たるが爲めに其の見
識といひ、その感化といひ改革者の間に獨歩す。カルビンの組織神學は
すべてその著「基督教の組織」に明記せられ、一理能く萬理に透徹し、
アベラルドの如き詭辨を用ゐず、エリギナの如く道理を偶像視せず。ベ
ルナルドのごとく權威を恃まず、アウガスチンの如く汎意ならず、ボナ

ベンチユラの如く機密的ならず、能くアンセルムスの精神を承け、トマス、
アッイナスの論理に通じ、基督を只一人の主となして聖書のいふ所は
その何事たるを問はず、悉く之れを遵守せり。要するにカルビンは聖書
を神の言となして地位を此上に定め、論理によりて之を開闡應用した
るなり。此を以て精密博學なる批評者の眼より見る時は、其の教理往々
にして一方に偏し、良心と道理とに照らす時は、衝突の恐れある前提を
用ゐたるも尠からず。

カルビンはアマナシアス以來アッイナスに至るまで議論の燒点たり
ま大問題の一として單純明晰に之を解釋せざるをなまといへども神
學者間にありて特異の点といふべきはその神學の組織にあらずして
或る問題に特別の重みを加へたるにあり。たゞはアマナシアスが三
位一體論を以て顯はれアウガスチンがペラギアン派駁論を以て顯は
れルーツルが信仰によりて義とせらるゝの教義を以て顯はるゝ如く

カルビンは即ち豫定説を以て顯はる所謂カルビン神學の要素茲にあり然れども豫定説は素とよりカルビンの創始にもあらず、獨占にもあらず、前にはオウガステンの如き、ゴツテスチヨールの如き、トマス、アックイナスの如きあり、後にはバスカルの如き、エドワルツの如きありといへども、其の解説尤も當を得たるものに至りては蓋しカルビンを以て第一となす所謂豫定説に云く、神その御意により、またその榮光の爲めに或人類を撰んで之れに永生を與へ或人類を撰んで之れに永死を與ふ。人は原罪によりて只惡をなすの外自由意思の力を失ひ、而て善をなすの自由意思を回復するは一に神の恵みによる。されど此の恵みは只撰ばれざるものにのみ與へらるべきものにして、その撰ばるゝは神の前知によるにあらず、全く世界開闢以前よりの聖意なりと。之れに反對する人にはゼレミー、テレル、アーチビショップ、ホエトリ、教授モズレーの如きあり、こは自由意思に反對するのみならず又神の偏頗を

示して愛の神と稱之、正義の神と稱するに矛盾するの恐れありとカルビンの説は保羅の書翰に其の論據を有するものなれども、尙ほ且つ半面の眞理を代表せしに過ぎざるが如し、偏見狹隘の誹りを受け、宿命論なりと稱せらるゝも豈又止むを得んや。

カルビンの神學は素とより欠点あるにもせよ、十六世紀及び十七世紀の思想界に非常の勢力を及ぼしたるは疑ひなき所にして、佛蘭西、荷蘭、蘇格蘭、英蘭、亞米利加の學派何れも其の大なる影響を受けたり。カルビンは之を呼んで万代の光と稱し、難しとするも、尙ほ思想不定時代の明星たりしと論を待たず、過去三百年に於ける神學書を閱じて其の後世に遺せる勢力に及べば、余輩轉たカルビンの非凡なるに感せざるを得ず。ノックスもクランメルも、クロムウエルも、マシウ、ベールも皆その學徒たるに過ぎず、佛蘭西に於ては、カルビン派即ちユীগノーたり、清教徒はカルビンを呼んで、豫言者となすに至る。豈又盛ならずや。

されどカルビンは實際に過ぎたる尊敬を受けざる見ゆる点もなきに
 あらず、カルビンは平民主義を有せし人なりといふものあれば、却て寡
 人政治に近き貴族主義を執り、ゼチバの政体の如きも實際は彼れが此
 地に至らざる前已に成立し居たるなり。其他カルビンは良心の自由を
 輕んじ、異端を苦しむると中古の加特力教徒に異なるものあらず。その
 サルビータスを助けざりてより見る時のガリレオを殺し兼ねまじき
 人なり。蓋しサルビータスのカルビンにして之を望まば、其命を助けんと易
 かりしに却て法官に訴へて之を殺さざめたり而してサルビータスの
 肉體は焼き盡されたれども其の精神は灰滅せず、近代のユニテリアン教を
 生めり。又カルビンのハルテナルの情愛なく、アウガスチンの宏量なく、そ
 の心を支配するものは獨り智あるのみ。彼れは正統教を愛するの外に
 情と目すべきものを有せざりしなり。只人と交はりて能く交誼を維
 に堪へたるものは、予が一特性にして、カルビンのカルビンたる所以又

茲にあり。カルビンは頓才と想像力を欠きたりといへども、予の意思力
 の敏なるに至りては驚くに堪へたるものあり。曾て讀みたる所、曾て聞
 きし所は、未だ之を忘失せたることなく、僅かに一二回面會せし人をも數
 年の後確かに之を識別せ、咄嗟の辨論といへども、字句を違へずして數
 事を處分したる後に之を反覆せり。その判断力、解剖力、總括力、皆他人の
 及び易からざる所、聖書の註解に至りては懷疑的、評論的の調子を欠け
 りといへども、聖書評論學者の何れも珍重する所なり。カルビンは著書
 の數、トマス、アクイナスほどに多からず、文体の快活なると、ケカルタイ
 アに似たり。

カルビン、身体薄弱の人にてありながら、其の勤勞は非常なるものあり
 き。通信、牧會論文起草、註釋、編述、政治上の運動の外に、週を隔て、毎日説
 教をなまたるが如きは、通常體のものといへども、及び易からざる所な
 り。予の寡欲にして、金錢名譽に意なかりざるは、強めて之をなしたるにあ

らずして天性全く然りしなり。又非常に悲しむともなき代りには非常に喜びともなく、笑ふと稀に、樂しむと少く、遊戯を知らず、幼童婦女と雑話せしとなく。人の欠點を見ては、曾て之を寛假せず、社交風流の何たるを解せず、妻を娶りたるが如きも感情の交通をなまて、その勞苦を慰めんが爲めにはあらで、只家事を打ち任かするが爲めなりき。音樂詩歌美術の類に對しては、殆んど好尚あるとなく、交友の中には一の詩人なく、一の美術家なく、窓外一望アルプス氷山の偉大莊嚴なるを見るも、何の感だに起らず、一心また抽象的の理想と嚴正なる實務との外に余念あるとなかりき。その辨論は單純直截にして、罵らず、詐らず、演説術よりいへば、決して雄辯といふべからず。道理に訴へて感情を顧みず、良心に質して想像力を度外視したる人なり。

カルビンは柔和なれども、また嚴正なり。曾てカスチルローといへる一友人その攝理の教義を非難したるに、ゼチバの退去を命せられ、カスチ

ルローは飢えて死せり。又ゼチバ水師提督ヘルリン婚筵にて舞踏したる廉を以て投獄せられ、ホルセツといふ國手は豫定説に反對して無期徒刑に處せられ、グルトエは宗教の規則を輕視したりとて斷首せられたり。サルビーナスの如きも、道徳高く、學問該博にして清廉潔白の人なり。まかども、遂にカルビンが毒炎に死せり。されど當時寛大自由の氣慨一般に乏しかりしを思へば、彼れまた時勢に超絶する能はざりしものとまで之れを恕せざるべからず。神の愛を恃むよりも、神の怒りを畏るゝと甚しかりしが如きも、また然り。その時代が中古を去ると甚だ遠のらざりしかば、トマス、アグイナスを支配せし思想は尙ほカルビンを支配するの余力ありしと見へたり。彼れの欠點は清教徒風の潔癖といふ点にやあるべからん。今日の人は之を旅伴とするに堪へざるべく、之をクリスマスの賓客とするを望まど、而してその敵もまたこれよかこそ起りしなれ。

ゼチバはルーターの爲めに厚く、近頃紀念碑を起つるの舉ありたれども、カルビンの爲めには薄しといふべし。されどは却てカルビンの本意にかなひやせん。カルビンは見へざる主を愛するを知りて、名譽權勢を鴻毛の輕きに比したる人なればなり。宜なる哉幾許の過失あるに拘らず、天下後世の之を欽望敬愛すると。若し夫れ長老教會にして世界の文明に何等かの功を奏したりとせば、必ずやその名譽の幾分をカルビンに頒たざるべからず。清教徒の居えし基礎、米國人の偉大を添えものありとせば、カルビンの啓導によるもの多しといはざるべからず。人或はカルビンを尤むれども、カルビンの嚴酷はクリストムに執れず。カルビンの沒風流はパシルに執れず。カルビンの潔癖はミカエルアングロに執れず。カルビンの社交的ならざるは、パスカル、クロームウエル、ウイリヤム、ゼサイレントに執れず。若し夫れ其の效績の偉大なるを其の性質の高貴なるより見れば、功罪相贖ふて余りあり。且つやカルビ

ンはその敵に嚴なりと共、其にその味方に親切なりき。年五十三、其弱体漸く勤勉に疲れて死期將に近きにあらんとするや、朋友同志を會して最後の勸告をなし、流涕咽嗟の内にも裕々として訣別の期近きにあるを説き、誠心籠めたる祝禱をなきて、一同を基督に薦め、豫定の時に朋友ベザの手によりて死す。時に一千五百六十四年五月二十七日夕陽の輝き眩ゆきまで、其の陋室を照せり。

蘇國の宗教改革者

シヨン、ノックス

(John Knox)

蘇格蘭宗教改革の勇將シヨンノックスは一千五百〇五年を以てハツ
 チントンに生る、(或はイブ東ロシアン)父はレンフリウ縣大地主の子
 孫なり。一千五百二十一年を以てグラスゴー大學に入り、卒業の後ち同
 校の哲學教授として其名揚がる。此に於てかノックス年尚ほ二十五歳
 に満たず、教會憲法の定めたる年齢に達せざりかとも、按手禮を受け
 て牧師となる。されど、こはノックス自らの希望にあらずして當局者が
 その功業に愛でたる特典なり。當時蘇格蘭教會は腐敗の頂點に達せ、國
 富の過半は僧侶の掌握する所なり。又彼等は概ね名奔利走の徒にぞて
 殆んど宗教者の体面を失ひ、宗教道德の何ものたるを知らざるものさ
 へあり。一千五百二十八年二月末日ハミルトンの火刑に處せらるゝや
 改革の氣焰漸く燃え、一千五百四十年に至りては機大いに熟す。當時ノ

ックスはカルチナル、ビートンの配下たるセント、アンドリュウに教授た
 り、茲が改革説に傾き、故を以て邪義と看做され、職を辞えて退隱す。土
 地の僧侶等市民の之れか感化を受くるに至らんとを恐れ、暗殺を企つ
 るに至れり。一千五百四十四年シヨージ、ウイッシャート蘇格蘭に遊ふ。
 ノックス即ち之れに従ふて諸方を巡迴し、常に刀劍を佩びて警衛甚だ
 力む。後ちウイッシャートの捕はるゝや、ノックスも亦偕に行かんぞ主張
 したり。がウイッシャート犠牲は一人にて足れりといひ、決心動かすべ
 からざりしが、即ち他に免かれ去れり。されどウイッシャートの死刑に
 處せられし以來、新教徒は多くセント、アンドリュウズに集まりて、敵を防
 ぐの用心おさく、怠りなかりかノックス亦諸生を携へて此地に止
 まり、初めて説教す。ノックスは身牧師なれども、之れまでは謙遜して自
 ら説教をなせしとなかりしが、多數の懇請否み難く、感泣して之れに應
 じたるなり。後ち半年、佛兵城を陥れ、ノックス遂に佛國に移さる。其間十

九ヶ月の辛酸擧げていふべからず。而して僅るに之を免かれたるは英國女皇の周旋によるを稱せらる。

ノックスは漸く囚虜たるを免かれいへども、蘇國にてハ働くべき折なかりしを以て、英國に至り、説教者となれり。當時ノックスは監督に叙せんとの内命を受けたれども、自ら監督政治の不可なるを知り居たれば、斷然之れを辭退し、却て英國教會の信仰個條及び禮拜の風習を改良するを助けたり。一千五百四十二年ゼームス第五世崩トメリ王位に即き、其母攝政となるに及びノックス多くの改革者と共に海を越えて佛國に遁がれ、其間或はチープふあり、或はゼチバにありて、同國人の間に周旋し、且つガルビンと交際して神學上少からざる進歩をなせり。一千五百五十五年一たび歸國して大に運動を試み、改革の基礎殆んど成れり。超えて五十六年再びゼチバに赴むき、一千五百五十七年クレンケイルン、エルスキン、アルジル、モレー等の諸侯書を飛ばして歸

國を促すと急なるを以て一千五百五十九年五月二日を以てノックス蘇國に歸着せり。

當時女王また謀反を名とて數人の説教者を所刑したりしに、此事ノックスの説教を聞かんとてベルスに集まりし人々に聞え、一同大いに怒りて、此の上は法官の制止、説教者の説諭にも服せト斷トて偶像及び偶像敎的のものを破壊せんと激昂せり。女王また大いに怒り、ベルスを破壊して男女老幼を塵にすべしといひ、佛軍を出發せしむるの用意を整へたり。然るに隣國よりもベルス人等に加勢せんとて走せ集まるものありと聞き、漸くその心を鎮め、遂に策略を用ふるに決ま、即ちアーデル、モレーの両侯を遣はして彼等が騒動をなさんとする所以の意を詰らしむ。

ノックス此時總代となりて答へて云く、女王が所刑したる者等の皆これ神の僕にして、又蘇國の忠臣なり。女王の火若しくは劍によりて支へ

んとする宗教は、耶穌基督の宗教にあらず、是れ蓋し人爲の偽教にまて、女王の計畫は遂に成就し難し。女王は只人に逆ふのみならず、また神に逆ふものなればなりと。

アーシル、モレーの兩侯之れを復奏するや、女王云く、今後またペルス府の改革者を煩はすとなかるべしと。ノックスは府民に説て曰く、此の約束は決して長きを得ざるなりと果えて女王は暴かにペルスを陥れ、佛軍をして之れを守らしめたり。

此の違約の行爲は、アーシル、モレーの兩侯を怒らしめ、兩侯は遂に改革者の内に投じ、ファイフに退隠し、マン及び其の他の諸貴族と會合して使をノックスに遣せり。恰も好ま、此時ノックスはクレイル及びアンズスルーサル等に於て説教し、次日はセント、アンドリウスに至るべき都合なりき。

大監督此報を聞きて驚愕一方ならず。先づ百人の士卒を募集し、直ちに

その使を諸貴族に送りていはしめて云く、ノックス若し説教せば、兵力の響應を受くべしと。

貴族等即ち之れをノックスに傳へて又此地に来るなかれといはせめたるに、ノックス云く、我れは人を侮辱せんとして基督を説くものにあらず、是れ神の保證し給ふ所なり。我がその地に赴かんとするは一箇の利益を計らんが爲めにあらず、又或人を中傷せんが爲めにもあらず、我れ若し暴力の妨ぐる所とならざる限りは、我良心明日の説教を中止するを許さざるなり。神は先づ余をしてファイフのセント、アンドリウスに説教せしめ給ふ。而して若し佛軍の爲めに妨げらるゝとありとも、余が再び説教の機會を得るとは堅く信じて疑はざる所なり。此を以て神は余を此地に召し給ひしとを信し、諸兄が余を止むるとなからんを望む。余が一身の危険に關しては、乞ふ意を勞するを止めよ、余の生命は余の敬し奉る神の聖手にあり、故を以て神の命し給ひし義務をなすに於

て何等の恐嚇をも恐るゝとなしど。
 貴族等其の志の動かし難きを知り、遂にその意に任せたるに、其の説教は非常に聴衆を感動せしめ、都民も法官も説教後、力を併せて瞬く間に全市の偶像を破壊せり。
 斯くてノックスは信者の一隊に圍まれて意氣揚々エデンバラ教會に赴ひきたるに、王軍此地に屯して雙方の小闘絶えず、止むを得ずして此地を辭し、遂に蘇の全國を巡廻するの途に上り、二ヶ月の間に大抵之を果して新宗教を宣布し、大いにその味方を増せり。
 此時に方りてノックスは改革者の爲めに英國の力を借るの周旋をなま、首尾能くその目的を遂げたり。當時改革派通信の事務一としてノックスの手を経ざるものなき。
 ノックスが此頃の煩劇なると非常なるものにして、晝は説教に遑なく夜間は公用の書翰を草せり。ノックスは改革派の靈魂に於て、常に危険

の地位に座し、直言讜論、公席にも私室にも、能く人心を作興すすべての離間策すべとの欺騙を打ち破れり。さればノックスは常に舊教徒及び王軍の爲めに覗はれ、公賞を懸けて之れを暗殺せんとするものあり、私怨の爲めに道に待ち伏せするものも亦甚だ少からざりき。
 一千五百六十年攝政薨す。此に於て同年八月國會は羅馬教の禮拜を禁ま、新教の信仰個條を受け、教會内の名士を各地に配置せしむ。ノックス即ちエデンバラ駐在を命せられぬ。されど此の改革の基礎は尙ほ堅固といふべき程にはあらずりき。
 一千五百六十一年女王メレー入國す。メレーは幼少の時より佛國にありて羅馬教徒の教育を受けたる人なれば、信仰自ら之れに傾むき、蘇王一代の名譽は蘇國民を羅馬法王の配下に復皈せしむるにありとなり、改革者及びその人民の新宗教を忌むと甚だしく、如何にもまて其の志を遂げんものと苦心し、國會の決議あるにも拘らず、挑戦の第一着手と

して王宮附屬のホーリールード會堂に彌撒祭を執行せんとせり。女王は云く、是れ我が權利のある所、國會の決議の關せざる所なりと。改革主義の貴族等も亦之れと同一の意見を執り、淺間しくも女王の意を迎へてホーリールード會堂の祭式に參列せんと約しぬ。當時の歴史家云く、貴族等女王の命を受けて退出するや、一人としてあらざりしき氣色あるものなく、最初は彌撒を撤せよ、然らざればすへての僧侶を殺せと絶叫する程の勇氣ありしものども、皆その熱心を失墜せり。是れ恐らくは一種敵し難き女王の魔力に魅せられたるならん。

されど此に一人あり、女王の魔力を以てするも朋友の辨護を以てするも素志を執りて動かざると金鏡の如し。之を誰とかなす、即ち改革派の勇將ジョン、ノックスこれなり。初め女王が稍たもて立ちて美麗莊嚴を盡くし、彌撒祭を執行すとの報を聞くや、ノックス即ち聖ギルス大會堂の講壇に立ちて、痛く偶像禮拜の不可を鳴らし、之を結んで云く、一の彌

撒は宗教鎮壓の爲めに一万の兵の上陸し來れるよりも我れは之れを恐るゝなりと。

此の説教の風聞頗る喧しく、彼れより之れに傳へて、遂に女王の耳に達せぬ。女王即ち直ちにノックスを宮中に召し、問答時に涉りしが、詰問の要はノックスがその長上より許されざる宗教を説きたりといふにありき。ノックス云く、眞正の宗教は長上に起源し、長上より權威を得たるにあらす。全く神より來るものなりと。斯くてノックスは聖書の語を引用して王は教會の父なり、女王は教會の乳母なりといふや、女王云く然り、然れども、卿の教會は我が養育すべきものにあらず。余は羅馬教會を保護すべし。是れ蓋し眞正なる神の教會と覺ゆればなりと。斯くて一論一駁互ひに譲る氣色もなかりしが、ノックス此の初對面の時よりして、女王の好敵手なる代りに、又その危険の敵なるを獨り心に合点せり。

其後幾許もなくしてバツシー虐殺の報至る抑も此の事件は女王の叔父ガイウス侯爵ユリケノ一の徒が禮拜の爲に集まりたる者を掩殺したるなり。女王は是れこそ彌撒祭を執行すべき好機會なれとて、即ちホール・ルード會堂に於て之を執行せり。ノックス此の時もまた講壇上より激語を以て痛くその失當を罵りたりしかば、再び女王の闕下に召されぬ。

ノックス云く陛下の聞ける所我が陳べし所と異なるものあり陛下若し余が前の説教を聞かんとならば今その儘之れを再演するを辭せざるなりと。此に於てか女王初めて新敎牧師の説教を聞き且つ云く卿若し今後我が行ひの意に満たざるものあらば私かに來りて我れに告げよ、我れ必ず卿の忠告に耳を傾けん。決して公然の攻撃をなすと勿れと。ノックスは斯る懇切なる言を聞く内にも、こは我れを去て王宮を辱るゝ先ざらんとすの極みに外ならざるを知り、不快の思ひありたれども

亦いふ所なくして退出しぬ。此の時侍臣の一人竊かに「彼れは恐るゝ色なし」といひしをノックス聞き尤めて云く、貴女の喜はしき顔を見て何が爲めに恐るゝとわらん。余は許多の怒れる顔を見たり、されど曾て一たびも恐れたるとあらざるなりと。

當時ノックスの鰥夫なりしが、一千五百六十三年三月ステューアルト、マーガレットと稱する十六歳の少女と結婚す。ノックス此時五十八なり。マーガレットは王族なりければ女王ノックスの専横を憤り、舊敎徒等へまたノックス魔術を用ゐて此の少女の愛を買ひ遂に蘇國の王位を乗取るべき下心なりと風説せり。

一千五百六十五年メレーは美男子なる已れの從兄ダーンレーと婚す。その風説あり、此に於てか國民一般に激昂し、ノックスまた痛く講壇上より其の非を詰責せり。女王も亦大に怒り、即ちノックスを宮中に召す。此の面會は前二回の面會に比して更に激烈なるものありき。即ちノッ

ノックスの闘を排して僅かに室内に入り来るや、女王直ちに大呼して云く、君主にして我が如き待遇を受けたるものは未だこれあるべからず、我れは卿がすべての演説を忍び、如何にもして卿と相和がんとを努めたる。されど今は亦忍ぶ能はず、我れは神に誓つて復讐する所あらんとす。いひ終りて涙潜々として下る。侍婦等走り寄りて之を宥め、之を慰はりたり。

ノックスは自若として女王の泣き止むを待ち、即ち曰く、陛下講壇の上には、我れ何人といへども余に不平を訴ふべきにわらず。陛下講壇の上には、我れ只神を主人となえ、その言を述ふるのみ、又他の主人あるとなく、地球上決して事おべき主人あるとなしと。

女王は再び泣けり。ノックス即ち其の涙の収まるを待ち、謂て云く、我れは人の悲まむを見て喜ぶものにあらず、我れ我子を叱正し、其の泣くを見て心に痛苦を感ず、陛下の泣くを見て豈喜ぶものならんや。只我れは決して陛下を侮辱せしにあらざりて、我が義務を果せしに過ぎず。而して我れは我が良心を傷み、我が國民を賣らんより、不本意ながらも陛下の涙を忍ばざるを得ざるなりと、意氣共に軒昂す。

此の一言は侮辱の言を吐きたるよりも尚ほ女王を怒らまめ、直ちにその退出を命じ、隣室にありて我が意を待てといへり。ノックスが宮女に對して尤も眞摯なる罵詈の言を吐きたるもまた此の時にあり、其の言に云く、美女等よ、諸子若し常に斯る家に住み、其の生涯の終りには、斯る華美の有様にて天に至らるべきものとせば、諸子の生涯また樂まきかな。されど其の好むと好まざるに拘らず、死必ず諸子の上に来らんとす。

女王は遂に此の忠告を聞かずして、ダーンレーと婚し、一子を擧ぐ。ダーンレー或時其の朋友の勧めに従ひ、ノックスの説教を聞きしとあり。當時尚ほ之れによりて、兩者調和の端を開かんとてなり。然るにノックス

は是れを得難き機會なりとて執政者の失當を鳴らさ、彼等は人民の虐
主なりと罵りたりしかば、メーレンレー心中にその不敬を憤り、遂に
之を元老院に訴ふ。元老院即ち數日間ノックスの講壇に立つことを停止
せり

此間女王は其の愛嬌を以て貴族と結托し、カザリンド、メヂチ及びアル
グア候など、申合せて異派迫害に力を盡しければ、改革派の人々何れ
も暗雲の掩ふ所となり、ノックスはエデンバラを去り、モレー候また英
國に出奔す。

一千五百六十七年二月十日メーレンレー暗殺に遇ふ。人民の激昂一方な
らず、且つ女王自らホスウエルに命じて手を下さしめしなるべしとの
風説高く、さりとて其の証據はなかりしが、此事ありてより未だ數月を
經ざるに女王はホスウエルと婚したりければ、蘇國人民は不義不正を
憤ふるの余り、斯る君主の下に立つを屑しとせず、直ちに謀叛を起して、

メレーを捕ふ。メレーはラングサイドの一敗に位を捨て、英國に遁れ、
一千五百八十七年まで十九年の間獄中にあり、終に死に處せらる。

ノレーが本國を蒙塵したる以來、改革の事業驟々をえて進み、北方の山
中に住せし人民を除き、蘇國民悉く新教に風靡したり。ノックスまた十
年一日の如く愈々その事業を大成するとを勉めたりしが、一千五百七
十二年六十七歳の時「聖バルトロマイ」の祝日に起りし残酷なる暗殺の
報知を傳聞えて死せり。

ノックスはかのルーテルの如く非常の偉人たりしに相違なし。其の死
するの日、蘇國攝政モルトン侯墓に對して大呼して云く、此の中に人の
顔色を恐れざる勇者横はると。

思ふに熱心と毅剛と清貧とは、これノックスの諸徳中、その最も超絶な
るものなり。ノックスまた當時に行はれたる學問に精しく、隨つてまた
人民の教育を奨励し、此の貧國よりして多くの有名なる學者を出せり。

子の雄辨にして人を動かすの力あるは之をルーテルに比すべく、風俗の質素にして幾分か愛憐的なり。一点は之をカルビンに比すべし。されどノックスの訓言は余りに嚴格にして、其の性の激烈なるをまた度に過ぎたり。ノックスは自ら嚴格に、自ら率直なるを以て、人の過失を見ては少しも寛假する所なく、上下貴賤の別なく之を攻撃して其の鋒の余りに鋭き爲め、却て其の罪を悔みずして怒を發せしめしとあり。されど熟々思ふにノックスが斯くも愛矯を欠ける所以のものは、神特に此の人を撰んで勇猛激烈なる蘇國人民間の改革事業に當らしめ、温順なる人の望んで得難き危険に對抗し、反對と戦はせしものにあらざるなからんや。彼れは苦學し、奔走したるが爲めに、又講壇に立ちて演説すると度に過ぎたるが爲めに、元來壯健なりと身体を傷れり。されどノックスは其の重き病に罹りたる當時も、剛毅にして痛める色なく、自若とじて子の死を待てり。

尊王家、尊法王家

ボスエー

(Bossuet)

ボク、ベニン、ボスエーは一千六百二十七年九月二十七日ヂブーンに生る。父は有名なる法律家なり。幼にして其の生地なるゼスイット派の學校に入り、十五の時バリの大學に移る。才學の進歩非常に速にして、夙に神童の稱あり。十六の時「ホテル、ド、ロンプーヤ」の説教者として招聘を受けたる如きは、一は當時の慣習然らむるものありといへども、また其の名聲の非凡なるものありとよらすんばあらず。果せる哉、其の説教は非常の喝采を博しき。

一千六百五十二年、按手禮を受けて、長老となり、次でメツツの大寺院に迎へられ、「カノン」「アーチ、ヂーコン」「ザトン」に累進す。新教の神學者パウルフエリーの信仰問答に對する駁論を草せ、是は此時にあり、彼れが論客の雷名を轟かし、教會の聲望を繋ぐに至りしもの實に此の書より初

尊王家、尊法王家

ボスエー

まる彼れの論壇に現はる、や寔に機を觀るに敏なるものといふべきか。蓋去當時の人心恰も此の問題に注意を集め、教會及び國家は共に新教徒の改宗を望み一時なりければなり。

ローセルは前王の時代に方りて新教徒の政權を破壊し盡せる人にして當時の大政事家と共に宗教の均一は國家の治安に必要ななりと信したりといへども、良心及び人情に於ては自ら忍びざるものあり腕力を用るて之を嚴責するが如きは策の得たるものにあらずとせり。此を以て一朝兵亂の戡定するに方りてや、彼れ即ちあらゆる政權を用ひて新教徒改信の手段となし、多くの人をして又同一の策お出でしめたり。ホスエー此の中において其の名尤も著はる。

ホスエーの信仰問答駁論は皇太后の法意を促がし、且つ又そが雄辯の雷名は自ら其の寵遇を倍せしめ、ルービル會堂に召されて路易十四世の前に説教の恩命を受くるに至れり。路易此の説教を聴きて感喜一方

ならず、書をホスエーの父に賜ひて其の胸臆を述べ給へり。これ蓋し路易は非常なる複調的人に於て、一事を以て樂しむと能はず、宮中嫉妬の便佞に飽きては、基督教牧師の説教また自ら愉快に感せらるゝふありを以てなり。されどホスエーは此の他に尙ほ一つの大望あり、そはチュレンをして舊教徒者たらしめんと之れなり。ホスエー一千六百六十八年を以て有名なる教理解義を著はし、一千六百七十一年之れを出版せたり。該書の方によりて、此の大望遂に成就せり。

此時に方りてホスエーの勢望愈高く、パリ大監督は之れに命じて法王とジャンセニスト(ゼスイツト派)に反對し、アウカスチン主義を奉ずる一派との間に行はる、異論の調停者となせり。當時ポート、ローヤルの女僧等ジャンセニストの教理を奉じ、其の律法に遵ふものあり、ジャンセニスト派の開祖ジャンセニウスが遺まつる一大書の中は五の罰すべき箇條ありといふを名として有名なる宗門調書に署名すべしとの

脅嚇を受けたり。女僧等は、容易く羅馬教の唱ふる教理に服して、隨分其の命に應じ兼ねまじき氣色なりしが、さりとて彼の一大書といふを見たるにあらねば、果して五つの箇條なるものありや否やに就て疑ひを抱けり。此に於てがボスエー此の難局に當るべしとの命を受け、屢々集會を開きたる末、ボスエー即ち彼等女僧の爲めに一長文を草し、精銳なる論理と健全なる神學を以て之を論証せり。女僧等は素とより論理及び神學の何ものたるを解せざりまかども、又大いに感激する所あり、遂には法王アレキサンドル第七世の命を奉ずるに至りぬ。ボスエー即ち女僧等を祝きて云く、御身等は試問を受くるの煩を免かれたりと。又云く政府の命するが儘に何事にも同意を表し、署名をなすは、是れ御身等の義務にして且つ特權なりと。ボスエーは誠に自ら信する所に篤きものといふべし。

一千六百六十九年ボスエーはコンドンの監督を命せらる。翌年之れを

辭して更に要地に昇り皇太子の侍講となる。

皇太子は如何なる人なりや之を歴史に徴するも、才低く、性陋まじ人なりといふの外に一も知るべきものなし。されどボスエーは皇太子の爲めに有名なる万国歴史入門を著したりといふ點より見れば、天下後世の皇太子小負ふ所又少しといふべからず。只其の書余りに高尚完備にして却て皇太子の用に適せず、ボスエーが直接の目的は些少の功たもなかりまは惜むべきとなり。

ボスエーは熱心其の職を盡くし能く其の務を守りたりといへども、一方にはまた其の本領ともいふべき異義家と議論を闘はすを怠らざりき。新教のクラウドといふものど一大激論をなせまは實に此の時にあり。チユレンの姪にヅラスといへるものあり。ボスエーの教理解義を讀んで新教の教理に疑ひを生じ、之をクラウドに謀りたるにクラウド云く、余ボスエーと對論し、以て阿嬢の疑ひを決せんと。ボスエー即ちクラ

ウドの要求に應ト茲に一大激論の端を開けり其後両者は各々顛末書
 を出版したりしが記する所少しも曲庇隠蔽と目すべきものなしとい
 へどもまた相同しからざる所あり而してツラスは遂に叔父チユレン
 と共に舊教徒となれり。

ボスエーは一千六百八十一年に至りて皇太子侍講の任期充ち遂にモ
 ーの監督となる讀者或はボスエーを以て佛國舊教社會の對論家と
 て意氣常に揚々たりと誤認するの恐れあれば茲には少く彼れが
 監督の職を盡くま信仰と愛とを以て其の對論の筆に代へたるを記
 せざるべからず。

路易はボスエーの退職に遇ふて大に惜む所あり未だ幾許ならずして
 之れに授くるに政治上の任務を以てするに至れり。

佛國諸王の宗教權を弄するや此に久し然れども一として法王の公認
 を經たるにあらず只その默許を憑めるのみ然るに路易の尙ほ之れを

繼續せんと謀り一のみならず實にその範圍を擴げんと計畫せり此に
 於てか路易と法王との間に數年に互れる論争を開けり一千六百八十
 二年に至り法王インノーセント第十二世路易に對して脅嚇する所あ
 り一かば路易即ちボスエーの勸告に従ひ討論の末去就を決せんとて
 教會の總會を催せりボスエー此の會議に於て尤も有力の議員にま
 て、開會の説教をなま議事の主要を痛論せり蓋しボスエーは非常の尊
 王家にまて、路易に對しては敬重の念殊に厚かりといへども又法王
 に對して不忠なるを不信仰のと思へり故を以てボスエーその雄辨
 を振ひ初めに先づ教會の威嚴を説き充分法王の地位を辨護したる上
 更に法蘭西王國及び國王に最高の讚辭を呈しぬ。

此の總會は才智に富める人々の集會なりければさしもに困難の問題
 なりまにも拘らず最も圓滑に進行せりされどボスエー一身の困難は
 此の總會の終りし時を以て終るを得ざりき蓋し國王の羅馬法王に對

する権利問題は、未だ法王の満足するほどに決定せられたるにあらず、且つボスエーが此の總會を召集したりとの一事ハアルプス以南の神學者を激したればなり。ボスエーは極力自家の辨護に當りたれども、敵の勿論其の朋友といへども、或者は王を尊ぶが爲めに法王に對する義務を忘れしめて之を罵りたり。

ボスエーは此の總會の解散するや否やまた教會の爲めに異端攻撃の勞を執り種々の小冊子を出版せたりしが、これ即ちボスエーが一千六百八十八年に至りて、新教會變遷史と題する大著あるに至りし準備なりき。書中新教に對する舊教徒の重要な論旨、之を盡くして余蘊あるとなし。

余輩のあれよりナンツ勅令復活時代のとに筆を廻らさるべからず。抑もボスエーが此の無法壓制なる勅令に對する意見如何といふに、彼れは其の素行に於ても判断に於ても決まて政府の暴虐を嘉するもの

のにあらず。されどそのラゴドック監督に與へし書翰によれば宗教均一の爲めに禁錮罰金を加ふるとを厭はず、路易十四世の行ひの義に戻るとにあらずとなせり。之れによりて之を見れば、ボスエーの勅令に對する意見は時世に卓絶せしほどのものにてはあらざりしなり。而してボスエーは如此迫害を是認したりといへども、其の新教徒に對する處置に至りては、その反對者も亦共に賞讃せし所なり。

以上述べたるが如くボスエーは佛蘭西ユークーノーと國教を調和するが爲めに非常の盡力をなせしが、此時恰も獨逸皇帝及び諸侯の准允を得て、獨逸に於ける路得派と羅馬教徒一致の畫策あるに會し、ボスエーも亦之れに週旋せり。初めノイスマットの監督とハノベルの有名なる新教信者モラナス等相會して協議し、結約する所あり、已にして新教會よりは、ライプニッツ出で、羅馬教會よりは、ボスエー出で、此議に與りぬ。ボスエーとライプニッツとは書信を往復すると十年に互り、之れ

によりて自らも益する所ありと、もに一致運動に與へたる利益も亦少きにあらざりき。されど此の相談は遂に纏らす。二教會は相も替らず、分離の儘にして終らぬ。

若し夫れポスエーの晩年只此の一失策に止まりたらんには其の名譽の更に大いなるものありしなるべし。ポスエーは頭髪銀を飾り、徳望日に増すの時に於て微弱なる婦人と一人の益友に不名譽の勝利を得たり。所謂婦人とはギヨン夫人にして益友とは即ちフェテロンなり。ギヨン夫人の歴史と寂靜教の復興とはフェテロンの歴史中に之を盡すべければ此には記さず。されどポスエーとギヨンとの關係に就ては、聊かいふ所なかるべからず。ポスエーは當時宗教事件の例とて其の裁判人を命せられ、ギヨンの教理審問に着手したるに大いに羅馬教會内の攻撃を受けたり。そは何故かといふに最初の間はポスエーのギヨンに對する處置溫和耐久なりと、已にして熱心と憤怒に堪へ兼ね、遂に

此の微弱の婦人に對して非常の迫害を加ふるに至れり。元來フェテロンは基督教徒の道徳に關して幾分かギヨンの説に同意する所あり、又ギヨンの信者たる資格に對して、全然敬意を表するものなるがポスエーは之れに反え、強めて己が説を用ゐ、已が感情に隨はんとを要求せり。ポスエーの文書によりて、其説を辨護し、且つ又故意に其の論点を法王に及ぼせり。當時ポスエーに對する尊敬の尋常ならざりしが爲め、敢く之れを非議する人なりといへども、此の書を読めば法王より命ぜられたる審問委員等の密かに奸計を廻らせしと、法王が非常なる諫争に遇ひまゝと見ると、堪へざる廉々所々に散見せり。さればポスエーの味方等の之れを辨護するに當りても、此等失態のと全くポスエーの同意を得ずとてなしたるものなりと、はいはず、却て宗教に對して無私公平の熱心ありしが爲めとなせり。余輩もまた云ふんとす、元來此の衝突事件たる、深く法王を信し、聖靈の助けを借りて羅馬教の爲めに其

の信仰を保護せんと志せる人の意志より發源し來りしものなりと。ポ
スエーは遂に勝てり。されどその名聲は此時よりこのかた日にく
減却せり。

ポスエーはうの殘年の間尙ほ余勇を保ちたりしが、遂に病の愈
へざるを知るや、専ら聖書を友とし、病苦の閑あるに乗じて詩第二十三
篇の註解を草まぬ。彼れ死する時、年七十六。實に一千七百〇四年四月十
二日なり。

ポスエーは其の生涯の間、ゴール教會の主動者なりき。而てその感化
の及ぶ所實に一にあらず。その遺書に至りては、四六版二十卷に及ぶ。又
ポスエーハ路易十四世の乞に應じ、ゼームス二世が新教會を愛して
其の特權を用ふると能はず。猶豫逡巡するを諭せる書翰を草せり。日付
けは一千六百九十三年五月二十二日にして、此書大いに見るべきもの
あり。

佛國人はポスエーを以て歴史家、演説家、神學者の上乗なるものとす。
又その著万国歴史入門に與ふる名譽は大いに公平を得たり。此書當時
の人の喝采を受くる能はざりしといへども、其の深遠なる學植その富
麗なる知識の物産として耻かからざる好著なり。其の葬禮演説集(國
王及び王族の葬儀に於ける演説を集めし書)に至りては、ケオルテイヤ
獨り數多き同時代の諸演説集より挺で、之を雄辨と賞讃せり。その演
説は生者と死者とに偏頗なく、徳を擧げ不徳を罵り、聖書の句を引用し
て万様の論趣を之れに歸結せまめ、尺寸の罅隙あるとなららむ。

ポスエーの議論文は流通の廣さと結果の永久なるよりいへば、其の歴
史及び演説に優ると万々といふべし。羅馬教會教理解義はポスエーの
著書中にありて尤も簡單なるもの、一なるも、當時恰も種々なる妄誕
怪説の行はれし時に出版せられしとて、筆鋒極めて鋭く、その神學書
中にありても有數のもの、と稱せらる。随つて之れに對する反對論もま

た多く、こは舊教の教理を挫げて新教徒を陥れんとするものなりといひ、慷慨するものあり、嗟嘆するものありき。無論此の書の説く所は、大いに他の羅馬派神學書と其色を異にする所ありといへども、さりて此書もまた羅馬法王の准允を得たるものなるを知らざるべからず。且つや此書によりチユレンを初め、有名なる人々の羅馬教に歸依するに至りしとあり、強ちに此書を擯斥すべきにあらざるなり。思ふに、當時ポスエーの勢力を以てすれば、一喝能く許多の人心を服するに足るべく、且つ又眞摯なる羅馬教徒等は、ポスエーの説を讀んで必ずやその教會内に行はるゝ、頑僻固陋の習慣定教を株守するの必要なきを知り、喜悅の眉を開きしとならん。

此の書の出づるや、許多の偽善なる羅馬教徒等は、ポスエーの品性にまで攻撃の鋒を及ばし、ポスエーこそは表面にいふ所に反せし意見を心に抱けるものなれと評判せり。されどこは全く無根のとなりき。

余輩敢ていふ、ポスエーは愛と眞理の爲めには万障を排えて卓然獨立せしほどの人にあらずと。而して彼れの名聲は能くドビンに比すべし。但ドビンは自由を得んとて、心を苦まめ、思を焦せし人なるも、ポスエーに至りては、寧ろ束縛の中にあるとを甘んじたり。彼れは心を盡し、誠を傾けて議論をなす、されどこは獄舎を脱せんが爲めにあらずして、之を改良せんが爲めなりき。新教徒を罵り、之を迫害せしが如きは、偶々以て其主義に忠實なりとを反証するに足る。

神秘教、寂靜教の好友

フエネロン

(Fenelon)

フエネロンは佛國ペリゴール縣の貴族にして、一千六百五十一年八月六日を以て生る。幼にして才名あり叔父なるフエネロン公爵殊に之を奇とて、自ら監督の勞を執りて、之れを教育せり。フエネロンが「セントスルピース」神學校に入りまも公爵の意による。

フエネロンは神學校に入りしものから、其の心を用ゐて講究する所少くも僧位僧官に意なきものゝ如くなりき。却て他日傳道者の地位に立たば、北米の野蠻人か、希臘アナトリヤ杯の回教徒を教化するを以て任せん。志またりくなり。されど其の朋友等は臆病にも、亦小量にも、此の計畫を以て然るべからず。なす、反對の議議んなりしかば、心ならずも、按手禮を受けたる後ち數年の間、「セントスルピース」教區の傳道に従

事たりき。

年二十六に及べる頃ほひ擧げられて婦人信者を教育し、獎勵するが爲めに設けられざる會社の長となり、同時に叔父の公爵と家をも同ふして住居せり。フエネロンが當時佛國に神學者とて演説家として歴史家として雷名至らぬ限なかりし。フエネロンに知られたるも、亦恰も此時なりき。フエネロンは、フエネロンに托するにポイトウ縣に於ける新教徒攻撃の爲めに設けられたる一會の監督を以てしたりしが、此れ予即ちエロゲノ一の徒がナンツの敕令を復活せしめたる政府の苛策と必死の戦ひをなしたる。一千六百八十五年てふいとも有名なる年なりける。フエネロンは素とより兵力を借りて我が義務を果さんとを快とせず、至る所蒼生を脅嚇するが爲めに設けたる兵器什陌の撤居を命せし程なりき。其の後日の措置を察するに、一も此の寛大仁厚の行爲と相矛盾するものあるとなく、長上の反對に遇ひても、一毫ばかりだに其の志を

動かすべくは見へざりける。

フエネロンはポイトウ縣にある間、政府よりは何等の賞典をも受くるに及ばざりき。こは偏へに路易十四世が之を見ると甚だ冷淡を極めたるが故と知られたり。されど大鵬何時までか其の翼を伏せてゐらるべき。大才は遂に久しく隠るゝを得ざるなり。彼れが叔父なる公爵を音づる、人の中にポーピリエル侯と稱ふる人あり、フエネロン幸ひに去て此人と交り結びしは侯爵は一千六百八十九年バルガンヂー侯の教養係を命せられたり。バルガンヂー侯といふは、路易の孫に當り、父に嗣で佛國の王位に昇るべき人たり。去なり。ポーピリエル侯が此の榮譽の職に就きて劈頭の事務はフエネロンを擧げて侍講となせしとなりき。後ち八年フエネロンは已に王者に對ても、頓首自ら持じ、敢て其前に膝を屈せざるを以て稱せられ、全國皆な其の聲望を慕へり。されどバルガンヂー侯は全幅の心を傾けて愛敬を盡くし、謙遜にして能く之れに

師事し、信用至らざる所なく、深くその感化を受けしものゝ如し。抑もバルガンヂー侯が幼心にも能くフエネロンの命を奉したるものは、フエネロンを恐れたるが故にあらす。一にフエネロンが教へたる敬神の心より此に至りしものなりといふ。又バルガンヂー侯は其才高く加ふるに非常の勉強家なりければ、フエネロンは之を教授するに於て少しも困難を覺へず、喜樂の内に之れに従事するを得たりき。

一千六百九十四年フエネロン命を受けてセント、バルリール院にあり、後二年カムブリーの大監督に進み、傍ら侍講を兼ね、カノンの許しを受け一年中三ヶ月の間バルガンヂー侯の許にありき。次いで自ら感ずる所あり、バルリール院を去り、同時に又大監督の職をも辞したりしも、敢て其の理由を喋々して同僚の悪感情を買ふの愚をなさざりき。されど此の穩便の手段は、却て道理づめの攻撃に遇ひ、皮肉の詰難を受けし。是れは是非もなきとせもなりき。例せばライムの大監督の如きは、一旦辭職

の報を開くや即ち曰く、カムブレー大監督は自ら良心の信する所に任せて此職を辭せり而して余は自ら良心の信する所に任せて此職に止まるなりと。

此の辭職はフェネロンと路易とが愈々離るるの合圖たりとなり。路易素とよりフェネロンが味方にめらす、且つや宮中の官宦に去て二人を反目せしむるの計番に熱心なる人さへ少からず、事端は即ちフェネロンとギヨン夫人との交情開けたる機會によりて爆發せり。

ギヨン夫人といふの寂靜教と稱する一派の領袖なり。寂靜教とは禪定觀念して虚無寂靜の境に造詣し心に靈悟する所あるを以てその主義とす。此の派の中にありて夫人は殊に眞愛の教義を以て顯はれ、常に教ふる所を聞けば即ち曰く圓滿なる基督教信者は利益乗除の考へを打ち捨て、神を愛せざるべからず。即ち不幸の考へを離れ、單に神を愛せざるべからずと。フェネロンが夫人と面識したりしは、即ち朋友ボド

ピリエル侯の宅に於て世を初めとするとなるか、當時フェネロンは深く夫人の宗教上の見解眞摯率直なるに感入り、又其の持論とする所大いに我が所思と契合せを以て交誼自ら尋常に異なるものありき。されば夫人の説は當時の社會より輕賤を受けたりと同時に、フェネロンをいふせく思ふ人々は、彼れこそ夫人の門弟なれと持て嗤すに至れり。其實當時の羅馬教といふは神秘教といへる一派によりて僅かに基督教の精神を傳へたるとなりしが、フェネロン深く此の派の教理に通じ、而して其の教理が甚だしく寂靜教と相類し、ギヨン夫人のいふ所フェネロンをして我が常に敬愛する人々の説と究竟相同じと思はしめたるなり。さればフェネロンは寂靜教に對して全く好友を以て相交はり、時として過激放漫の説を聞くとあるも、是はギヨン夫人の性質然らしむるものにして、教理が然るにあらずとなしたりき。

寂靜教に志を傾けたるもの等は、追々公然と之れを名乗り出づるに至り、監督等とは容易ならざるとなして、狼狽大方ならず、遂にはギヨンの教理審問をなすべしとのとに決し、即ちボスエー及び外二大神學者を擧げて其の委員となしぬ。フエネロンは當時己にギヨンが爲めに二なき味方にてありつれども、さりとて何人も未だ其の正統的信仰に疑ひを挟むものあらず。ギヨンの審問中もフエネロンは審問を受けざりしのみか、其の審問の終はる頃ほひには、カムブレー大監督に擧げらるゝに至れり。然るにフエネロンに對するの攻撃は、意外にも其の最も敬愛する朋友によりて加へられしは、また不思議といはざるべからず。元來フエネロンはギヨンの審問に遇ふとを何れかといへば、寧ろ迷惑に思ふ方なりしを以て、ボスエーの如き徹頭徹尾反對の意見を抱き、ギヨンをして語究せしめずんば止まずとの意氣込ある身にありては、失望一方ならず、然るにフエネロンの偶々事情ありて、聖徒格言と題する書

を出版して大に自家の地位を辨護するや、ボスエー怒り心頭より發し、堪へ兼ねて路易の玉座に咫尺し、フエネロンが恐るべき異端なることを奏上し、王自ら其の手を下して、教會の腐敗を一掃し給へと乞へり。さりとてフエネロンは少しも恐るゝ所なく、斷乎として彼の書の判定を法王の決斷に任せんと乞へり。此議は幸ひにして可かれといへども、同時にまた己が教區に退隱すべき旨の命を領せり。フエネロンは昨日に替はる榮枯盛衰の有様に、少きもその心を止めず、偏に忍耐と温順を以て時の不可なるに應せしものから、敢て其の剛腸雄魂を失墜するとなかりき。當時フエネロンとボスエーとの激論は、歐羅巴全州をして其耳を聳てしめ、フエネロンが活潑に巧妙に有名なる大神學者を敵として打ち克ろざる様如何にも勇々しく、政府方は一同力を併せてフエネロンに當り、一兵の後援だもなきに、單騎馬を立て、少しも怯むもとなかりし様は、一人も驚嘆せざるはなかりき。獨り卑劣極まりたるは、カ

ルチナル、ノアイル及びその同輩にして彼等は密かに我が意見は彼の書にある所と同トといひながら、之れを公言するを憚りたる之れなり。斯くて政府方の人々は頻りにフエネロンを苦しめんものと策を下すと至らざる所なく遂にはフエネロンの名あるものは何書に限らず書肆之れが印刷を拒むの甚しきに至れり。フエネロンは此等の逆境に處して意氣自ら鈍り、身体また健康を失はざるにあらざりしかども、其の初志断つて變改せず、他の論難攻撃に遇ふ時は驚くべき程神速に之れに答辨せり。斯る勢なれば輿論も何時しかフエネロンの説を認むるに至り、殊に法王の如きは前功に鑑みて深く之を罰するを惜みたりき。されど反對者の鋒は尙ほ益々鋭を極め、フエネロン今は、や全く王宮との關係を絶ちたるが如き身分となり、侍講の名義を削らるゝと共に俸給を褫はれぬ。此の俸給といふは、フエネロンが時めき、一頃帝室の財庫屢々空しきを見て幾度か辞退せし所のものなり。

法王は前にもいへる如くフエネロンを惡むとさほ甚だしからず。偶々ボスエーの筆に成り、路易の書翰を見るに方りて、稍激昂遂に之を罰したりしも政府方の者等は、尙ほ手緩るまどなり、飽き足らざる思ひありき。そは法王何等の諭令をも發するとなく、只單に何々の箇條は誤謬にして危険なりといひ、之れを説明せる著書に絶版を命じたるのみにて普通の例に基き、之を火き盡すの舉に出でざりしを以てなり。されどフエネロンは毫も屈撓する所なかりき。フエネロンは其後直ちに彼の諭令を版行し、已れが邪義と認定せられ、諸條を列擧して法王のいふ所皆我意を得たりと公言せ、已が教區の信者には、今日まで堅く執りて動かざりし主義を記載せる我が書物を讀むなかれ、又之を所持するなかれといへり。此時に當り、羅馬教徒を攻撃するに余力を遺さざる新教徒等は一齊にフエネロンの卑劣反節を罵り、其聲極めて喧かりき。されどフエネロンは法王の神權を確信して疑はざるの一人なり。其

の味は惜むべしといへども、其意は憐れまざるかべらず。
 フエネロンは我が家の雇人に命じて一の草稿を謄寫せしめたるに彼
 れ竊かに之を巴里の書肆に賣り渡さ、書肆は直ちに之を印刷せり。此書
 題して『チデッセー第四巻續篇』一名を『王權を有せるテレマカスの冒険』
 といふ。政府にありては、此の書全く彼のフエネロンの手小成りしとぞ
 聞き込むや、直ちに使を派せて尙ほ第一巻の刷了せざるに乗上、直ちに
 之れを押取り又書肆を嚴罰に處せり。然るに其中の幾分は警官の手に
 漏れて人より人に傳はり、其中の一巻は草稿の殘部と共にヘージの一
 書肆の手に入りぬ。ヘージは之を出版するに於て、何等の掛念もなき土
 地なり。

されば政府に於て印刷を差止めたる程の書物は、如何なるとを記した
 るにやとて、一般の人心其の出版を待つと、大旱の雲霓も嘗ならず、我れ
 先づ其書を見んとて印刷所の門前市をなし、印刷するとも容易ならず

る程の騒ぎとなりぬ。テレマカスの初版は斯る次第を以て遂に出版せ
 られぬ。

路易に説くものあり云く、テレマカスは全く路易と其の政府を諷刺し
 たるものなりと。一般の讀者もまた同様の臆測を下したりき。此に於て
 か路易の憤激は一方ならざると同時に、歐州の全土フエネロンの勇を
 稱するの聲相呼應し、路易の敵は大に皆其の批政失行の公けにせられ
 たるを心地よきとに思ひ、且又哲學者の中にもフエネロンの政府組織
 に関する見解極めて寛大に、極めて妥當なりとて稱讃するもの少から
 ざりき。何ぞ計らん此書はフエネロンが尙ほ侍講たりし時に於てバル
 ガンギー侯の爲めに著述せしものならんとは、彼れの實に仁君を擧げ、
 悪王を罵り、善政を賞し、批政を責むるに當りて自ら路易及びその内閣
 の忌諱に觸るゝを意となさざりなり。彼れは寧ろ王政の敵にあらず、
 彼れが唯一の希望は即ち仁君を戴くにありしと甚だ明白なりとす。或

は云く、當時路易は經濟學上より非難を受けて痛く驚嘆したりと。思ふにこれは事實にあらざるべし。當時濟經學の尙ほ極めて幼稚の狀態にありつればなり。

フエネロンの最早監督の任務を全ふして、其の余生を終るの外にまた身を煩はすものなきに至れり。彼れは退隱の後ち極めて温厚の君子を以て自ら居り、人の之を訪ふものあれば、丁重親切を以て之を遇したりき。されど其の交際社會は甚だ狹隘にして、多くは其の家に住する僧侶なりき。中には其の親戚のものもあり之を愛撫すると至らざる所なかりしといへども、さりとして溺愛にはあらざりき。此間フエネロン唯一の樂しみは、單身郊外に徜徉えて人情を察し、神と同化するにありしといふ。途上若玄貧賤の族に遇ふとあれば、自ら先づ座を草の上に占めて其の肉体及び靈魂上の情態を聞き、時としては自ら見る影もなき茅屋に往きて、心地よげに談笑せり。

十八世紀の初めに當り、フエネロンは突然にも再び論壇に現われ、又政治上の運動をなせり。フエネロンは元來ジャンセニスト派を惡むと甚だしく、當時遂に再び筆を採りて之を駁倒するの止むを得ざるに至れり。されどフエネロンは新る場合に臨みても尙ほ自家獨得の格言たる剛愎酷薄は福音の精神にあらずとの語を忘るゝとおかりき。フエネロンが政治上の運動に關しては、大同盟軍の組成を促すの書をポーピリエル侯に送りしを以て劈頭第一となすべし。書中當時の世論たる西班牙王位繼承の問題を説き、兩國連合の利益に及び、兩國怨望の情を和くるの策を建て、軍兵操縱の事を記し、各大臣の力を論じ、軍營の位置布陣の設計に至りて止む。此の戦争の將に局を結ばんとするや、政府改革の首唱者たるチュブラー侯に書を送り、改革の事を論ず。此書はバルガデー侯の一覽に供し、他日王位に昇るの日、之れを參考となさしむる企てなりしに、惜しむ哉。バルガデー侯は佛國全人民の希望に孤負え、聰明

の質を齎らして、溢然と云て薨去せり。フエネロンは我子を失ひ、之如くに慟哭せり。

フエネロン其後幾許もなく、云てまた病を得、苦惱大方ならざり、去も、深く耶穌の死を思ふて悲しまず、一千七百十五年二月七日六十四歳を以て永逝せり。財庫に一厘の貯へなく、尚ほ遺命によりて家具の賣却代と小作料とを合せ、悉く之を慈善救恤の資となせり。

死後また一人の寂靜教事件を喋々するものなく、世人は只フエネロンを稱讃して、彼れは迫害者たるを肯せざり、以て迫害せられたる人なり。彼れは眞理及び正義と確信せし所を行ひ、良心の其非を教ふるあらざれば、前説を取消すとなかり、といひき。

當時の有識者も亦フエネロンが天才器量を稱讃して止まざりき。彼れは智慮高明に云て、識見該博の点に於ては、素とよりボスエーに及ばず、されど想像の富麗なる材料を活用するの巧妙なる点に於ては、當時ま

た其敵なかり、云なり。ボスエー曾て之を評して云く、彼れは天才を以て輝く、誠にてれ天才の人なり、余の企て及ぶ所にあらずと。

其の名著『アレマカスの冒険』が初版の當時、彼れの如く持囃され、ものは境遇與かりて力あり、云といへども、今日に至りて尚ほ世人の愛讀する所たるものは、また其故なからんや。此書を読むものは、たとひ當時の事情を知らずとも、尚ほ且つ其の高潔なる思想感情を行るに、妙文を以てせし、魔力に恍惚たらざるものは、稀なり。路易の崩するや、此書また何等の檢束を被るとなく、一千七百十七年には、從弟フエネロン公爵自ら校閱の勞を執り、一本を路易十五世に進獻す。後世に行はるゝもの皆、此書を標準と云て出版したるものなり。

奴隸廢止の率先者

ウイルリヤム、ペン

(William Penn)

「フレンド」派内にありて、ジョージ・ジフチクスを除く時は、その名聲またウ
 イルリヤム、ペンの右に出るものなり。ペンは一千六百四十四年十月十
 四日を以て倫敦に生る。父は海軍の士官にまて、又ウイルリヤム、ペンと
 稱し、チャールズ二世及びヨーク侯の覺へ目出たかり人なり。ペン十
 五の時、オクスフォルト大學第一年級たりしが、一日トマス、ローの説教
 を聞きて深くクエーカー派の信仰に傾き、幾人もの同級學生と申合せ
 て國教會の會堂に出席せず、私に祈禱會を開き、相共に嚴罰に處せられ
 しとあり。後ち又國王の命令によりて白法衣の制再興せられ、同學の書
 生中にも之を着用するものあるを見るや、ペン之を以て基督教禮拜式
 の單純を傷くるものとなし、其の朋友と共に後より迫りて之を引き裂
 けり。之れが爲めにペンの退校を命せられしが、斯る粗暴の所爲は、その

他日に比し來れば殆んど不慮議といはざるを得ず。

父なるペンは軍人の常をまて一たび議論を誤まれば、即ち之を腕力に
 訴へ、其の子を戶外に逐ひ出す程の人なれば、ペンの余りに陰鬱なるを
 見て欣ばず、一千六百六十二年父子相携へて巴理に遊歴せり。巴理の風
 俗或はペンを化して活潑に風流の人とならしむべきを望みてなり。
 然るにペンは幾許もなくまて巴理に飽き、ソームルに往きて有名なる
 新敎神學者モ―セ、アミノーと交際せり。ペンは此地にありて、宗教の信
 仰堅固に赴き、同時にまた境遇の感化を受けて容儀自らまどやかにな
 りしるば、一千六百六十四年歸國するに方りて父のペンは深く之を悦
 喜せり。

一千六百六十四年、父のペンは船にありて還らざると二年、ペンは此間
 にありて佛國在留中に得たる外部の感化を脱却し、またもやその舊習
 に立ち戻りて陰鬱の人となり、且つ宗教家と交際せり。父は更に此風を

移さんが爲め愛蘭に送りて同國の所領を管理せしめたるに首尾極めて好都合にて、ペンも父も共に満足に感じたりき。然るにペン一日コルに遊び、此に再びトマス・ローの説教を聴き、深く感動する所あり、以後屢々クエーカー派の集會に出席し、一千六百六十七年には英國憲法を度如きたりとの廉を以て、同志數人と共に禁獄に處せらる。されど之を上告するに當り直ちに放免せられたり。

ペンクエーカー派に加はりしその報一たび父の許に聞るや、之を呼び還へて、痛くその不心得を責め、ペンに紳士の振舞に反らざる限りは抗辨し、クエーカー派の人と交はり、クエーカー派の行ひをなす點に於ては決して之を改めざるべしと斷言せり。父は遂に一步を譲り、我れと王とヨトリ候の前にありては、帽を脱する様にせよ(クエーカー派の人は、何人の前にあるも帽を脱せず)と諭したれど、ペン尙肯せず、此に於て父は大いに怒り、之を戶外に追ひ出せり。

一千六百六十八年、ペンは講壇に立ちて説教を「高尚なる眞理」其外許多の書を著せり「揺めく砂の基礎」の如きも亦其の一にして是れ予ペンが公然迫害を受くるに至りて端緒なりける。此中に三位一体の論あり、ペンは三位一体を拒むものにあらざりしかども、英國教會の解釋は非なりと放言せざるに遂に獄に投せらる。在獄中有名なる「無苦無冠論」を著はす。書中説く所多くは自己の經驗にして、來世の幸福を希ふもの此世にありて徒らに苦しみ、空しく悲まみても詮なし。宜ましく劣情厭慾に克ちて自ら勉めざるべからざるを論ず、引証極めて該博なり。一少年獄中の作として見る時は、ペンの涉獵甚だ大なりしと驚くに堪へたり。

ペン獄中にあると七ヶ月、殘酷の取扱を受けたりしかば、一千六百六十九年父の許に踴躍して歸り來れり。

一千六百七十年禮拜條例の國會を通過するに方り、其の犠牲となりたるもの、ウィルリヤム・ペンまた實に其の一人なり。彼れニウ、ゲートに禁獄

せられ、審問の爲め、グレース教會町の一集會に臨んで説教せよとの命を受く。此の審問はベンが辨護の論法々理に適ひしと陪審官等が熱心に無罪放免を主張せしとを以て後世に有名なり。ペンは此時を初めとし、屢々英國憲法の寛廣なるを論じ、良心の自由を奪はざると、自他の利益なりと斷言す。或時、下院の演壇上より、或時は著書により、一千六百七十四年刊行英國當今の問題(天主教徒のみ利益を壟斷してクエーカー宗徒に信仰の自由を許さざるは不正なりと唱へ、英國國民の自由は英國教會設立以前よりして已に存するものなり、此の自由は宗教上の信仰の爲めに左右せらるべきものにあらずと論じ、公平正直にして害を他人に及ぼさず己が義務を怠らざる限りは英國人に英國人の特權を與ふると無論なり。政府の任は人民を保護するにありて、人民の宗教を保護するにあらず。今より三百年前アウステインの英國に上陸せし以來、人民完美なる憲法の下に生息す、されど憲法はアウステインと共に

來りてにあらす、又ルーラルと共に來りしにもあらす、況んやカルビンと共に國外に出ずるをや、我等は基督の贖ひと祖先等の恩顧によりて自由の民たり、然るを非國教徒たるが爲めに至當の權利を享受する能はざるに至りては非理の極なりと主張せり。

此年(一千六百七十年)父のウイルヤム・ベン薨す。當時父子の間全く和解す。父は子に對して少からざる敬意を表し、一年一千五百磅の歳入を讓與せり。十七世紀の時勢よりすれば、これ實に非常の巨額となす。此年の末、ウイルヤム・ベン再び六ヶ月の間ニウケートに禁獄せらる。法官の一人、私怨を揆みて、ベン臣民の誓約を怠りてと告訴せしによる。ペンは宗教上より迫害を受けたると之を以て終りとなす。爾後、ペンの教友等その主義に従ふて禮拜式を擧げざる爲め、或は禁獄せられ、或は罰金を課せられ、或は答たる、その其の跡を絶たざりしが、ペンは猶獨り此の派の無給傳道者を以て自ら任じ、英國にあるも、外國にあるも、或は著書

に、或は演説に其の主義を説き、其の信仰を表白せり。
ペンは世人の嫌疑を被ふる迄に、ゼームス第二世より鍾愛せられたり。されどペンの父とゼームス第二世とは、非常の親友たゞて、ペンの父の死せんとする時、ゼームスにその後見を托したるほどの縁故あるとを記憶せざるべからず。此に於てか、威望自ら高く、之れが爲めに下院の委員會に於て、クエーカー教徒は議員就職の際に誓約をなさざるも可なりとの主意を演説するを得たり。一千六百七十八年、此の建議は下院を通過したりしも、議會の閉會に遇ふて上院の議に上らざりき。
ペンは一千六百七十二年、ハートフタードシンア縣リックマンウチスの自宅に於て結婚す。一千六百七十七年には移りてサセックスのウチロミングハルトにあり、遂に此地に永住す。其の初めて米國の殖民事業に着手したるは、一千六百七十六年にあり、クエーカー兩派の争を調停す、兩派相携へて、ニウ、ゼルシーに殖民せんとを結約せよによる。ペン素

とより、奴隸財産等の問題に意なかりまといへども、一千六百八十一年ニウ、ゼルシーの東部に於て一地を購ひ、いまでは、輪驅して此の事業の爲めに奔走し、移住の人民と條約を訂結せ、又簡單なる憲法を制定して、殖民に立法の權利を與へ、隣保十二人の同意あるにあらざれば、禁錮罰金に處せらるゝとなきを証し、又信仰の自由を許さ、何事も皆寛大を旨とせり。ペンは又英國なるクエーカー宗徒の爲めに外國の地に自由愉快なる集會所を建設せんとを計畫し、父が海軍の爲めに立て換へたる一万六千磅の引當てとまて一地を得んとをチャールズに請願せり。當時英國政府の慣例として、米國無人の地方を開墾するものある時は、コトシ侯のニウヨルクに於ける、ベルチモール卿のニウゼルシーに於けるが如く、其地を給するのみならず、併せて政治を依託するの例ありければなり。一千六百八十一年王はデラウエア河畔を相違、父の名譽を表章してペンシルベニヤと命名せたる一地を賜ふ。ペン即ち「ペンシルベ

ニヤの概況を公刊し、尋で土地購買條約を發行す。後ち亦憲法草案を起草し、地價は一百エーシルに付き四十志と定め、別に年税一志を課す。又何人たりとも言若くは行ひを以て土人を侮辱し、虐待するを禁じ、之を犯すものあれば、移民相互に讒謗侮辱せし場合と同一の法律を適用す。又賣買の上に欺騙を防ぐべき箇條を置き、二人正邪を争ふ時は、雙方六人づゝ、即ち十二人の証人を出して之を決す。斯くてペンは憲法制定の精神を記して云く、余及び余の後嗣皆此の憲法を冒犯するの權なし。一人の意志を以て一國の利益を妨ぐべからずと。

此の憲法の下にペンの設立したる行政機關は、知事、參事會議會の三より成り、其中參事會及び議會は人民の公撰する所なれば、取りも直さず人民の代表者たり。知事は無任期大統領なれども、三票を以て限りとし、參事會は法案を制定し、提出し、法律を執行し、國內の治安を圖り、港灣都市、市場、道路等、公共地の位置を定め、國庫を監督し、裁判所を建築し、少年

教育の爲めに學校を設け、有益の發明をなせしものを表章する等の義務を有す。又出席定員は總員の三分の二とし、決議は出席者の三分の二によりて之を定め、議會は法律制定の權利を有せず、されど知事若くは參事會より廻付せられたる法律に對して賛否を表するの權利あり、また議會は司法行政の官吏を撰擧する權利を有し、定員の二倍を指名して知事をして、此中より撰拔せしむ。此の撰擧は年々之れを執行せしむ。無名投票を以て之を決す。

ペンは他日自ら此の憲法に改正を加へ、殊に議會に法律を討議し、若くは制定するを禁じ、條目を取り除けり。他日バルクは「米國の歐州殖民概況」中に記して云く、彼れは貴重なる憲法を制定し、其の人民に與ふるに世界各國自由民の得べし程の權利を以てし、此の法律の庇蔭によらんとて、其職を異にし、其國を殊にする許多の人民を移住せしめたり。彼れはまた宗教上、政治上完全の自由を以て國家成立の基礎となし、

ンシルベニヤ永久富強の策を建てたりと。一千六百八十二年ペン妻子を英國に残し置き、一隊の移住民(多くはクエーカー宗徒)を率ゐ、ペンシルベニヤに發向す。ペンは妻子に與ふるに長文にして且愛慕の念を籠めたる一書を以てせしが、此書を讀めばその家庭の親和、日常の行狀を察するに余りあり。十月デラウェアに着し、直ちに英國に於て發布したる憲法に従ひ、州の自由民を召集して議會を開く。當時ペンシルベニヤの地たる土民の存するもの尙ほ甚た多く、ペンの主義はたゞ王の許可を得ればとて、實際の持主を逐出して已れ即ち之を占むるを許さざりなり。さればペンの代理人等は相當の代價を拂つてその幾分を買ひ、殘部は兩者共有の相談を整へ、ペン自ら印度人及び殖民の而前に於て其の信用を確かめ、其の條約を訂結するの策に出でたり。此に於てか地を今のフィラデルフィヤ府のある所に相考、之を兩者集會の場と定め、且つ約

すらく、ペンと酋長とは相共に河岸に生ひたる楡の大樹の下に於て互に手を握り、信用を交換すべしと。豫ての期日ともなれば、黒面の印度人等大手を擴げて樹立繁きが中より續々現はれ出でたり。ペンは適宜の人数を隨へて之を迎へたるが、手に兵器を執らず、平生の服の儘にて軍旗もなく、護兵もなく、馬車もなく、目に立つものとは、緑色の絹糸もて編みたる飾帶あるのみ。而して其手に携へたる巻物は土地買上條約及び平和條約を記せしものと察せらる。ペンは酋長等と、もに間近になりし時、印度人等悉く其の兵器を抛ち、各其の酋長を圍んでをれ、其の座を占めぬ。ペン云く我等人類を作り、天と地とを治め、且人の内心を洞觀し給ふ神こそ知り給はめ、余及び余の友人等が諸君と平和親睦ならんと且つ我等出来る丈けの力を盡して諸君の益を計るを熱望するものなるを。我が同胞に對して兵器を弄するとは、我等の主義におらず、此を以て

我等兵器を携ふるとなき。我等の目的は他を害て神を怒らせんとにはあらず、却て之を利せんとするにあり。互ひに其の私利を違ふすべからず、宜しく打ち解けて友愛親切なるべしと。
斯くてベンは彼の巻物を解き開き、通譯者をして逐條その意味を説かしめ、賣買及び平和の條約を訂結せり。而して買上げたる土地内にありても、印度人は法律上英國人と同一き自由と安全とを有す。又二人の間に争論の起るとあれば、英國人六人印度人六人雙方立合の上にて之を決す。
了りてベンは土地の代價を拂ひ、尙ほ其前に擴けたる商品中より贈物をなせり。
後ちベンは彼の巻物を下に置き、更に此の土地は兩者の共有なることをいひ、且ついはく、余は諸君を呼んで我子ともいはし、又我が兄弟ともいはし。蓋し親子の間には不平あらん、兄弟の間には紛争あるべければな

り、又兩者の交情を鎖に比するとなかるべし。蓋し鎖は雨に朽ち、木に絶ち截らるゝとあればなり。只余は基督と其の血肉を等しくするものと思はんのみ。たとへば、一人の体が分れて二となりまものと思はんのみと。斯くてベンは角を携へたる酋長に巻物を交付す、すべての酋長に注意して三代の間之を丁寧に保存し、子孫を去て當時の様子を知らしめよといへり。此に於ては印度人等又丁重なる演説をなす、ウィルリヤム、ベン及びその子孫とは日月のあらん間親交すべしと誓へり。斯くて條約の訂結全し成る。佛蘭西の或著述家云く、是れ野蠻人と基督教徒との間に誓式によらずして訂結せられ、曾て違背せられしとなき唯一つの條約なりと。當時の光景は喬伯ベンジャミン、ウエスト一幅の畫圖に之を描寫せり、今尙ほフィラデルフ、ペンシルベニア府立會館内第一の重寶たり。此の條約によりて訂結せられたる平和は七十年の久き何の妨害をも受くるとなむに續續じたり。

ペンは一千六百八十四年の中頃まで止まりて米國にあり、此間只管その力を盡して一州の隆盛と秩序を希圖し、都邑二十を設立し、歐州人の定住するもの七千人以上の多きに至る。又行政官を擧げ、議員を擧げ、急務の公共事業を果しぬ。一千六百八十三年ペンは内地探險の途に上り、所見を草して之を英國なるペンシルベニヤ自由貿易會に寄送せり。ペンまた印度人を集めて議會を開き、十九の異種族と和親條約を結び去が、茲にペンが英國に歸らざるべからざる二種の事情を生じたり。一は即ち自己とベルチモール卿との間に境域の争を生じたれば、之を調停すべきと一は其の勢力によりて、英國クエーカー宗徒の受け居る困難を減すべきとこれなり。斯くて一千六百八十四年の十月英國に歸着しぬ。一千六百八十五年二月チャールズ二世崩す。されど議會に於けるペンが權勢は、チャールズ二世のなかり一方却て利益なりき。蓋し王ゼームス、ペンに對て眞摯なる敬意を表すると同時に、ペンの希望せ

る信仰自由は王自ら其教會に適用せんと希望せし所なればなり。然るに此事ありてより以來、ペンは實際舊教徒にして、身自ら「ゼスイツト」の借藉にありとの風説起り、ペンは心痛一方ならず、公私に對して其の無根なるを証せんが爲めに非常の盡力をなせり。又ペンは元來ステューアルト家(即ちゼームス王等の系統)に對して愛敬淺からざるとして、彼れは暗にステューアルト家を復位せしむるの志ありと疑はれ、拘留を受くると四回、毎回証據不充分的の廉を以て放免せらる。一千六百九十一年一千六百九十二年及び一千六百九十三年の幾月とは、倫敦に止まり専ら家に隠れて世上の嫌疑を避け、其後ち王及び元老院の前に立ち、辨護演説を試み、少くも疑はるべき廉なきを証明せり。

ペンは英國にある時、日余りに久しかりしかば、ペンシルベニヤに聊か紛議を生じぬ。クエーカー宗徒素とより平和を好むものなりといへども、又豈名譽心利已心なからんや。而してペンの議會及び己が權利を打

ち任のせたる人の處置に就て満足せざる所あり。即ち調和を破らざる限りに於て再三參事會を變更しぬ。是等のことが即ち一千六百九十三年ペンを知事の職より退くるの口實となり去が、そのが實際の原因はペンゼームス第二世に違法の通信をなしたりといふにありき。然るに一千六百九十四年八月曩の紛議は皆不在中に起りしものなりとて、ペン再ひ勅撰によりて知事の職に就けり。其後歸任の志熾なり。かども、一千六百九十九年まで之を果さず。此間の時日は英蘭及び愛蘭を巡遊して専ら傳道に力を盡くし又論文數篇を草せり。ペンが博愛家たるの事實は其の米國に歸りし時、黒奴救恤に盡力せしを以て著はる。當時ペンシルベニヤのクエーカー宗徒等は決議すらく、人間を奴隷として賣買し、所有するは基督教の主義に背戻すと。配下の人民己に然り、されどペンは黒奴に禮拜式參列の許可を與ふるに少の困難をも感せず、又彼等自己の利益を計畫するが爲め集會を開く。

自由を與へぬ。クエーカー宗徒の實に奴隷解放の先者に於て、又熱心家なり。といふは之れが爲めなり。クラークソン云く「ペンはフランダルフ井ヤ月次會記録に北米土人の狀況を記して其の開化の進度を保証せしが此度は、また奴隷賣買を廢止せしと、及び黒奴を解放せしとを証明せり。此時以來クエーカー宗徒は奴隷廢止問題と相離れざる間柄となり、未だ曾て之を捨つるとなかりき。而して此の宗徒間には追々奴隷を買取るとを拒むもの起り、或者は自ら所有せる奴隷を解放せんといふに至れり。彼等は遂に直接にも間接にも奴隷を賣買せ、若しくは所有するを許さずとの法律を設け、一千七百八十年に至りては、亞米利加全州に凡そクエーカー宗徒と呼ばるゝものは、一人の黒奴を有するものさへこれなかりき。此の例一たひ成るや各派争ふて之れに倣へり」と。北米土人を厚遇し、其の性質を高め、その幸福を進むるが爲めには、ペン實に米國にある間不屈不撓の奔走家なりき。又在米の間に起り去政策

及び議會との争ひは、ペンの傳記に屬するものにあらず、寧ろペンシルベニヤの歴史なれば、茲には之を畧すべし。博士フランクリンの攻撃も同ト理由によりて之を記さず。又一人にして知事と地主の權利を兼ねるは、不都合なりとの議論ありしかど、こは強ちペンの罪とはいひ難し。我等は斯る攻撃を受け、ペンの不幸を憐れまますんばあらず。彼れが名譽權勢に意を注がざりしや否やは寧ろ之を問はざるを可とす。彼れは殖民の爲めに巨額の自費を抛ち、許多の苦痛を嘗めたればなり。只一事の記憶せざるべからざるは、彼の條約訂結以後四十年間一滴の血だも此地に灑かれざりしと之れなり。さればペンシルベニヤの土人等は死後まで、ペンシルベニヤ知事チナスと稱へ、チナスは印度語にて筆を意味し、英語のペンに相當す。又一千七百二十二年知事ウイリヤムカイス卿が條約を訂正するに方り、土人等曰く、我等はウイルヤムペンその人の如くに貴下を敬愛するといひいとあり。ペンに對して最上の敬

意を表せしと知るべきなり。マコーレー卿曾て西部の一代言人ペンと稱せざるものとウイリヤムペンとを混同し、ジョーカー宗徒に對する惡感情を漏らすとて、痛くペンが政治主義を非難せしとあり。後ち漸くにして其の誤謬を發見せしかども、彼れは之れを正す得ざる君子の氣概なかり。されどマコーレーは尙ほ歴史家としてペンの大豪傑たるを記するの義務あり。其言に云く、敵國民も敵宗徒も等と云く之を聖徒とたふ。英國の此名によりて傲る所あり。彼れが會員たりしすべての會社は、彼れを使徒とて敬ふなりと。

ペンは一千七百〇一年英國に歸る國會に於て地主的政府を廢し、殖民地の之を國王直轄の下に置かんとの議事あるを以て之れに反對せんとてなり。然るに此の議案はペンの歸着せざるに先ちて撤回せられぬ。ペンは女王アンの寵遇を受くると、女王の父及び叔父の時代に異なるとなし、此を以て特に王宮の傍らケンシントン若しくはナイッブソツ

ジに居住せり。此時ベンは尙ほ宗教上の運動を廢するとなかりき。彼ればまた不實なる代言人に過當の信用を置きたる爲め、屢々裁判所に召喚せられて、不利の宣告を受けたり。彼れはまた之れらの事件及びベンシルベニヤに於ての失費相講みて資産漸く究乏に陥り、一千七百〇九年に、其の所領を六千六百磅に典し、一千七百十二年には、一万二千磅を以て其の統治權譲り渡しの約定をなせしが三回の癡撃打ち續き、爲め之を果さゝりき。ベンは身体己に不隨となり、氣また大いに滅せまといへども、さりて別段困難不幸に遭遇するとなく、一千七百十八年七月三十日ベルクシーア縣ラツシユカムラツシユカムの居に歿す。バツキングハムバツキングハムシーア縣のジヨルメン村に葬る。ジヨルメンの墳墓は英國のクエーカクエーカル宗徒の勿論、米國の同宗徒も亦非常の敬意を表し、遙々海を越へて此處に參詣するもの少數にあらず。往年ベンシルベニヤ州政府はベンの遺骨を購ひ之をファイラデルフイヤに移し、一大紀念館を設立せんとせ

いとあり。ジヨルメン會堂の委員等の痛く之れに反對し、所謂クエーカクエーカル宗徒は米國の方遙かに英國よりも多數なるに拘らず、其の紀念館は依然として本國に存す、
 ベンが第一の妻は一千六百九十三年に死し、一千六百九十六年第二の妻を娶る。二妻共に子あり。ベン即ち歐州及び米國の所有地を擧げて之れに分與せり。又ベンシルベニヤの統治權は之をチクスフォルド公とポーレットの兩人に委任せしが、決して賣り渡したるにあらざれば遂に地主の權と共に第二の妻の子に歸せり。後ち米國獨立戦争の時、ベンシルベニヤ州政府は十三万磅を以てベン家の所有地を悉く買ひ上げ、只スラウに近きストーク、パークのみトマス、ベン之を購ひ得たり。ストーク、パークは詩人、グレイの舊蹟に去て、トマス、ベンはグレイが圖書館及び草稿を合せて之を所有するを得たり。一千八百六十九年ベン家の嗣絶ふ。此に於てかその資産も悉く分散せり。

初代のクエーカー宗徒は制慾主義なりしと稱せらるれども、ベンは然らざりしが如し。其の家内の粧飾など、一も當時の紳士と稱するものに異なる所なし。彼れの卓上には紛ひもなき奢侈品あり、彼れは亦良馬を好み、之を以て人に誇り、又その家内には美々しく着飾りたる婦人を見掛け、その米國にある中には、僅か一年の間に一箇の價凡そ二十磅なる假髮四個以上を買ひ入れ、無邪氣なる田舎の舞踏會には、之れに反對せざりしのみならず、自らその家族を携へて之れに出席せり。

聾啞教育の開祖

僧ドレピール

(De l'Epée)

心に一點の私慾を挾まず、一に人類の不幸を憐れみて、千金の身を之れが犠牲に供したるもの古來其人に乏あらざり、ドレピール此中にありて、嶄然其の頭角を顯はせり。ドレピールの最初數年の間は名聲の聞ふるものなかりしが、事業の基礎は此間にありて、徐々に成立せり。次で其の愈々顯著なるに至りては、冷遇を受けたるのみならず、却て迫害を被り、其死するに方りても、何等の紀念をなさんとする人さへなかりき。(一千八百一十一年、セント・ロツク教會なる墳墓の上に) 偶々フーエーの如き人ありて、其の德行才器を賞讃し、ベピアン出で、其の名譽を表章したりといへども、尙ほ甚だ飽き足らざるの思ひあり。我輩の今より記せんとする所また必ずしも悉くそが公私の生涯を盡せしものにあらずといへども、聊か以て其の偉人たるを示さんと庶幾するのみ。

チャールズ、ソセル、ドレビーは一千七百十二年十一月廿五日を以てパ
 ルセイルに生る。父は御用建築師にして夙に才と仁とを以て名あり、其
 の子の教育には自ら身を以て之れに當り、慾を制し、神を畏れ、隣を愛せ
 しむる點に於て殊更、小意を用ゐき。ドレビーは斯る教育を受けて、惡の
 思想、惡の行爲、只管に恐ろしく思はれ、廉直正義、高潔仁愛の心日に發達
 せり。されど彼れは他日當時を顧みて我れ當時の誘惑一つならざりき
 といへり。ドレビーまた謙遜の情厚く、曾て他に求むる所あるにあらざ
 して能く質素に、能く人に下るを得たりき。又其の從順にして能く福音
 の示す所を奉じたるに至りては、彼れ生れながらにして神に事ふべき
 人たりしに似たり。されば彼れは年尙幼冠に去て教職に就かん志
 ざし、其の兩親の如きも、初めにかかくと不同意を唱へしかども、後に
 は其意に任せしむるに至れり。
 斯くてドレビーは教職に就くべき準備に汲々たりしが、無論種々なる

困難反對に遭遇せり。その初めてデヤコノの職に就かんとするや、巴理教
 區の慣例として信仰誓書に署名せざるを得ず。されどドレビーはジャン
 セニスト派の人なるを以て規定せる書式に署名するは、其の信仰に違
 ひ、其の主義に戻り、其の良心之れを許さずとて遂に之れを拒絶せり。斯
 くてもドレビーは幸ひにして假デヤコノたるを許されたりき。ドレ
 ビー素とより謙遜の人なりといへども、斯る陋劣の位置に満足する人
 にあらず、已にして大いに人類不幸に罹りしものを救はんとの志を起
 し、その計畫夙に成り、志といへども、之を實行せんにも其の位置の甚だ
 高からざるを以て果さず。茲に於てドレビー日夜に思慮を苦め、未
 遂に法律學を研究せんと志を起せり。法律學は其の父母が最初に學
 修させんと望み、玄學問なりき。ドレビーは遂に代言人となりて法庭に
 立つに至りしが、其間何等の快樂もなく、却て人類の乱暴、狡猾、詭譎等の
 惡徳に就て深く感ずる所あり、益々平和の福音を傳ふる人となるの決

心を堅からせめたり。博學にして寛大なりと聞えたるボスエーの甥にトロワの監督職にある人あり、此人また其の叔父に似て頗る寛仁大度の人なりしが、ドレビーをして其の同勞者たらしめんとの意あり、此に於てかドレビー再び宗教社會に移り、聖職に上り、トロワ大會堂のカノンとなれり。此後ドレビーは只管説教を勤め、常に其行ひを以て教の實を示すに怠なかりき。ドレビーは隣を愛するを以て常に其の説教の主眼となし、結果として現はれたるもの一にして足らず。されどその幸榮の遂に長きを得ざりしは、亦是非もなきとなりき。こはその木蔭を頼みつるトロワ大監督の間もなく、此世を去り且つ又その親戚ソーネンを尋ねて巴理に歸りたるにソーネンはジャンセニストの主義を奉ずるとて、ボイモン大監督その教職を褫ひ、其の友にして同一の信仰を抱けるドレビーのまた同トク此の運命に漏る、能はざりければなり。されどその信仰の單純に

して其の信條の寛大なるは後世共に許す所、ベビアン云く、其の信仰に關しては異論ある人と語らず。偶々之れに及ぶとあるも、決して論鋒を闘はずとあらざりき。彼れは良心の許す限りに於て會話の快樂を保持する技量ある人なりなりと。ドレビーは不圖たるより聾啞の爲めに其の一身を賭せんとの志を興せり。古來の學者にして、此等不具の輩を教育せんとの企てをなせし人なきにあらずといへども、其の企ての只學理上に止まり、斷つて實行せざるものあるとなし。而して之を實行したるものは、西班牙レーチンの僧ペドロ、ツボンスを以て初めとなす。ボンスは一千五百二十年より一千五百八十四年まで生存したる人なり。同ト西班牙人にパウロボネーと呼べる人あり、數人の聾啞を教へ一千六百二十年初めて聾啞教育に關する一書を著す。書中記号的のアルファベットあり、これ實に方今世界に行はる、聾啞教授法の嚆矢なり。其後英國にジョンブル

あり、一千六百四十八年聾啞の友一卷を著し、尋で一千六百五十三年博士ウチーリス又同問題の書を公けにし、博士ホルダル、ジョージ、シブスコマ、ジョージ、マルカルノー等相踵で現はる。ジョージ、マルカルノーは一千六百八十年聾啞の教師と題する書を著せし人なり。此時に方りて歐羅巴全洲漸く聾啞教育の必要を認め、互ひに討究する所ありしが中に就て最も著名なるものを瑞西の醫師にえて、ライデンの住人たるジョン、コンラッド、アンマンとなす。

茲に聾啞教育の方法を陳述するとは素とより余輩の本領にあらず、余輩は唯ドレビーの企てたる所、當時已に歐州に於ける學者の頭腦を悩ませ、問題たりとを示すのみ、而して歐州中此の運動に着手したるものは、佛國實に最後に居る。されどその成功ある働きをなせ、一事に至りては、世界に誇るに足るものなり。佛國實にドレビーを出し、シカルドを出し、ベビアンを出し、デケランダーを出し、其他に尙得數限りなき聾

啞教育者を出したればなり。

ドレビーが聾啞の教育に従事するに至りし端緒といふは、實に左の如し、ベビアンのお所によれば、ドレビーは之れまで未だ曾て聾啞を教育せんと志あらず、然るに一日去り難き用事ありて、或家を訪ひたり、去に内には二人の少婦あり、共に裁縫に従事し、また余念なきもの、如し、ドレビーは高く音なひたりしにも拘らず、彼等答へず、眼を擧げて只管我が顔を凝視せり。ドレビーは更に問ふ所ありしに、尙ほ答へず、ドレビー深く怪しむ、其の何の故たるを解せざりき、而して實は二人共に聾啞たりしなり。

間もなくその母歸り來り、涙を以て其の聾啞たるを告げ、或は悲しみ、或は嘆ち、はてしもなく見へたりける。當時バニンといへる僧齋を用ひて此の二人を教育したりしが、不幸にもバニンの遂に隔世の人となりたりしかば、其後何れの人も其の困難を厭ひ、その結果を危ぶみ、また

之を教育するものなかりしなり、ドレビー謂へらく、余若し此の二人を教育する方法を發明するとなくんば、二人は遂に宗教を知るに及ばずして死せん。余深く此の二人を憐れむの情に堪へずと。即ち其母に言て云く、日々我方に此二人を連れ來れ、我れともかくもして此の二人を教育せんと。

ドレビーはパニンの書を採りて見るに、未だ甚だ備はれり、といふべからず、且つ之れによりて、發育せしむるを得べきや否やと云々の疑ひあり。然るにドレビー十六歳の時、その教師と仰ぎたる一哲學者と會談の際に聞き、一場の談話は、此時に至りて端なく一の原理を發明せしむるに至れり。曰く思想と音響との關係は思想と文字との關係に異なるものならずと。當時また彼の教師は此の前提より結論して云く、若し常に目に見ゆる記號を書き、之れに添ふるに手眞似を以てして聾啞を教育せば猶ほ口頭を以て普通の人を教育する同一の結果を得べしと。

ドレビー云く余は左程此の解説に意を止めざりしかども、思へば攝理は已に其の基礎を此時に置き給へるなりと。彼れは此等を思ひ出し、だるより直ちに其の實行に着手したり。人が人々見て以て一笑に附たりき。是れ實に一千七百五十五年なり。一日一人の高僧入り來りて聾啞教育の實況を見、即ち云く、余最初卿を陋めり。されど余は最早卿に對して一点の侮蔑心なし。卿は實に社會及び宗教の外國人たるものを此中に歸化せしめんとする人なりと。ドレビーは素とより熱心余りある多血性の人なりしかば、時としては誤謬に陥りたるともあり、殊に尙ほ生徒の全く了解せざるにも拘らず、彼等は已に了解せりと速了せよとなきにあらず。彼れが當時聾啞教育一般の程度に考へて、余り迅速の進歩と思はるゝ程の報告を與へたるを見るも、或は之が爲めならん。されどドレビーにして若し彼れの如く熱心ならず、彼れの如く活潑ならずんば、聾啞教育の大切なるを一般人民に知らしむると難く、種々なる反對論

者を屈服するに由なかりまならん。

ドレビーの自記に云く、一日我が教場に入り來りし人あり余に示すに一卷の西班牙語の書物を以てし、且つ云く、之を買ひ給はゞ益する所尠からざるべしと。余は西班牙語を解せざるを以て全く無益なりといひつゝ、も尙ほその書を手にして、之を開きたるに偶然にも銅板にて作れる西班牙語のアルファベットあるを見たり。余は最早推考問答を須みず、直ちに要するが儘の代金を與へ、之を買ひ取れり。後ち此の書を読みたしとの念に堪へず、其の題号の *Arte Para enseñar a hablar los Mudos* とあるは正しく啞に談話を教ふるの法なるべしと解し得るや、一時も躊躇らふとなく、我れ我か生徒の爲に西班牙語を學ばんと念を起せり。或は曰く當時西班牙人ペレイラといふもの巴理にあり、自ら雙啞教育に就て其の自ら得たる結果を公にす。ドレビーは此人よりその記号的アルファベットを得たりと。されどドレビー自らはペレイラの法式を

知らずと明言す)

之れ即ちボーチーの著書たりなり。其後また朋友の一人よりアンマンの雙啞教授法を借用し、二書の助けによりて、自ら満足の結果に達するを得たり。

ドレビーが雙啞教授の成績漸く世人の知る所となるや佛獨兩國の學者間に於て一つの議論を醸成せり。ドレビーは極めて公明正大に其の實驗と意見を發表したりしが、其の議論に於て甚だ盡さざる所あるが如きものは抑も初代の創立者に於て多血性の人なりしが爲めと云て之れを恕せざるべからず。ライプチヒのハイニツクが反對論の如きは偶々以てドレビーの爲めに他山の石たりまや疑ひなき。さればドレビーは當時雙啞教育者の領袖に於て四方の尊敬至らざる所なく、ツリーツク大學の如きは特に其の名譽表章の決議をなすに至れり。ドレビーの教育法の甚だ可なりといへども若き今日より之れを見て

此中に欠点ありとせば、自己の知識を標準として生徒の能力に適すべき學科を教へざりてとありといはざるべからず。生徒は記號を言語に譯出するを知る。されどそれは彼等かその意味を解したるが爲めにあらずして、只機械的に之をなしたるまでなりき。此の欠点は彼れ一人に限らず、小學校の科業など往々にして同一の過ちに陥るを見るなり。夫れベスマロジ以前にありては、何人が果して能く教師の却て生徒たるを知らん。教師は生徒の爲めに教へられて今後の計畫を立て、兒童が如何なる風に感動するか、兒童の好尚才力は如何なる程度にあるかを察えて教授の法を設くるは、實にベスマロジありて以來のとなり。若し夫れ此の順序方法を以て普通兒童の教育をなすべきものとすれば、聾啞の兒童に處するまた何の異なる所かあらん。而してドレビー若し此に心付き能く其の過ちを改むるを得たらんには、彼れの成功果して如何なるものありしか。未だ容易に測り知るべからざるなり。

ドレビーが教育を受け、少童は前後實に夥しきものにてありき。その死の數年前に著はせし一書中には、六百八人の生徒を教ふとあり、されば此れより以後のものをも加へたらんには、必ずや千人を下らざるべし。又彼れは一時に六十人の生徒を教育せしとあり、これは全く貧人の爲めに企てしものなりければ、悉く自費を以て之れに従ひ、毫も他の補助を仰ぐとなかりき。ドレビーが父祖遺傳の財産より收入する所、年々凡そ一千九百弗あり、中に就て彼れ自己の爲めに費す所、僅かにその四分の一に過ぎず、其の余の専ら己が養子たる不具者の爲めに利用せり。ドレビー曾ていへるとあり、富人の我家に来るは、素とよりその隨意のみ。されど我身を抛つは後等の爲めにあらず、一に貧者の爲めなりと。ドレビーは獨り自ら居る時にても、必ずその生徒の爲めに謀り、生徒の爲めに働らざるとなく、彼等の急を救はんが爲めには、自己の究を顧みるとなく、自ら節約せると實に見るものをして忍びざる思ひあらしめた

り。一千七百八十八年の嚴冬、ドレビーは年己に老ひ、寒に堪へざるにも拘らず、炭火を用ゐず、以て其の豫算に欠乏を生せざらんとを力めたり。ドレビーの友人は往て之れを諫めたれども、肯かず。その執事は遂に最後の策を運らし、四十人の生徒をして其の室に入り、我等の爲めに身体を重んせられよと乞はしめたるに、ドレビーは僅かに之れに従ひ、他日自ら當時の事を悔めたりといふ。斯くてドレビーは豫算を越ふる。凡そ五十八弗なりければ、生徒の前に立ちて叫んで云く、我れは實に御身等の爲めに費すべき資金を彼れの如く多く私用し盡せり。ドレビーの教訓は實に各國諸學校の模範となりぬ。獨逸、瑞西、以太利、西班牙、荷蘭等の諸國は皆巴理に於ける雙啞教育法を採用するに至れり。茲に一つ特書すべきことといふは、當時の天下に最も勢力あり、二大帝王が何れも言を厚ふしてドレビーを奨励せしと之れなり。一は即ち露國女皇カザリン第二世にして、一は即ち獨逸皇帝ヨセフ第二世となす。

一千七百八十年カザリンの公使ドレビーが家に臨み、女皇の名に於て賞讃の辭を述べ、且つ手厚き贈物を賜ふ。ドレビー云く、公使よ我れは黄金に意なき、公使願くば我が爲めに陛下に奏せよ、我が事業にして若し陛下の賞讃を受くるに足るとせば、我が爲めに雙啞を送れ、若しくは我が爲めに此の教授法を傳習すべき教師を送れ。ヨセフのドレビーに對するは更に手厚きものありき。ヨセフはドレビーの功績を聞くや、其の領内に一つの學校を建築せんと決心し、自らドレビーの學校に臨みて、雙啞は如何なる程度にまで發達すべきものなるかを二時間余も實見せり。皇帝此時間はせ給ふ様、維也納に一年少貴婦人あり、生れながらにして雙啞なり。其の父母は之に授くるに基督教的の教育を以てせんと欲す、如何にすべきやと。ドレビー即ち云く、貴婦人に乞て自ら巴理に來り、教育を受くるとを得ば、此上もなきとなり。若し然るを得ずんば、敏才の人を送りて雙啞教育法を傳習せしめよと。皇帝は後者を以て然る

べーとなま、且つ云く之れ實に我國永遠の爲めに鴻益を遺すべーと思へばなりと。頓て皇帝の維也納に還御せらるゝや、僧ストルヒをえて筆を執らしめ、ドレビーに送るにいと丁重なる書翰を以てし、又皇帝自ら撰拔せし人才を送りて聾啞教授法を傳習せまめたり。ストルヒの文中に曰く、ドレビーは高潔の念胸に充ち、持てる程の才能を盡くしてその天職に従ふものなりと斯くて維也納に帝立の聾啞院設立せられたりしが、官立の聾啞院といふは實に之を以てその嚆矢となす。

ドレビーは晩年に至りて其の事業の前途を苦慮すると大方ならず、政府に請願して死後も此の事業を繼續するが爲めに、恩賜金あらんとを乞ひたりしに、政府は單に約束を與へたるのみなりき。ドレビー謂へらく、若し我が事業の佛國に於て止むとあるも、我が教授法は即ち維也納に於て存立す、これ僅るに我心を安んずるに足れりと。曩には獨逸皇帝のその學校に臨むや即ち云く、斯る有功の人にして、尙ほ一箇の寺院を

有せず、此の寺院の歳入によりて聾啞を教育するの地位にあらざるは驚くべきとなり、朕が領内に於て卿に一箇の寺院を與へんかど。ドレビー云く、我れ已に年老ひたり。陛下若し聾啞の爲めに去る優渥の恩を下さんと欲え給は、之を我が如き墳墓に近きものに賜ふとなく、此の聾啞教育事業の爲めに助力し給ふべと。

遮莫佛國の情況全く失望すべきものゝみにてはあらざりき。ドレビーの傳習を受けたる教師等は、何れも各地に離散して、それこそ其の功績を擧げ、ポルドウにありては大監督デシス學校を設立し、年少僧侶シカルドなるものをえて巴理に往きて聾啞教育法を傳習せしめたる等のとあり。一千七百九十一年には佛國々會國立巴理聾啞院を設立したればなり。デケランドー云く、シカルドは忽にして教師の意見に薰染せられ、熱心に之を講究するに至れりと。且つやシカルドは極先て人を見るに鋭く、想像また甚だ富麗なる人なれば、抽象的のものを具體的に

ひ願はま、人をして其の意を會せしむるに妙を得、又忍耐にして發明の才あるを以て新案を工夫するに力めざる所なく、彼れは實に生れながらにして聾啞教育者たりまとい見へたり、此の人即ちドレビーの事業を繼承せたる人なりき。

シカルドは實に徳望といひ、才力といひ、申し分あるとなければ、ドレビーは一方ならず、満足し、喜悅の余り、一日シカルドに謂つて云く、余は硝子を發明せり、之を精製して眼鏡となすは即ち卿の任なりと。以てドレビーが人に下るの公徳を察すべし。斯くてシカルドは全く其師の意を領し、又自ら其工夫を用ゐて發明せし所少からず。

ドレビーは素とより聾啞教授法の創立者たらざりしといへども、此の發明をえて廣く世に行はれしめたるの功に至りては、一に之をドレビーに歸せざるを得ず、彼れを以て聾啞教育の開祖となすも又何ぞ妨げん。蓋まドレビーの前にありては、之を實行するものよりも寧ろ理論を

講究するもの多く、或は之を實行するものありしとするも、其の理論を試験したるに過ぎざるべければなり。

ドレビーは一千七百八十九年十二月廿三日を以て歿す。葬儀の説教は佛王の説教者フナトセーなりき。

東洋の使徒

シユヴァアルツ

(Schwartz)

シユヴァアルツは東洋の使徒と稱せらる。印度に於ける不潔残酷の弊風を一掃して、平和仁愛の空気を輸入したるもの、此の人の功に越ふるはなければなり。残忍酷薄なる北米土人に傳道したる有名の宣教師曾ていへるとあり、信仰ある祈禱と苦痛との万事を成就するを得べきと。シユヴァアルツに於て其の驗を見るといふへし。シユヴァアルツは最初人に知られざる事數年、此間さほど目立ちたる成功ありまにあらず、されど彼れは忍耐にして仁愛に富み、眞摯率直の人なりければ、説教の聽衆日に増加せ、遂には印度の全州を擧げて信者となく、不信者となく、悉く其の聲に應ずるに至れり。

シユヴァアルツは一千七百二十六年十月廿六日獨逸のニツマルツなるソッペンベルグに生る、母はシユヴァアルツが尙ほ幼けなかりま時に歿

したりしが、臨終の際、此の幼子をして自人の前に立たしめ、生長の後には神の爲めに働くべしとの誓約をなさしめぬ。シユヴァアルツはソッペンベルグ及びカストリンの學校に歴遊し、長ずるに及んで頗る好望の少年となりき。且つ又シユヴァアルツの家は資産に富みたりしかば、宗教的の教育を受くると同時に世慾の誘惑を被むる杯のとは、毫末もおれなかりき。年二十にしてハルレの大學に入り、傳道事業の熱心なる贊成者たる教授ヘルマン、フランクの知遇を得たり。且つ此間にありてシユヴァアルツはタマル語の聖書翻譯の監督をなすが爲めとて、一人の學生と共に撰ばれて此の語を研究せり。此の翻譯は故ありて遂に完結に至らざりまかざるも、シユヴァアルツは以後タマル語の研究を廢するとなかりき。此の一理由よりして、フランク切にシユヴァアルツに懇懇して印度の傳道者たれよと忠告せたるに、シユヴァアルツの性質に投合したる忠告なりければ、一も二もなく之れを容れ、其の傳道地は荷蘭傳道會社

の配下たるコロマンデル海岸のトランケバルと決定せり。シユヴァアルツは按手禮を領せんが爲めにとて、コーペンハゲンに往き、一千七百五十年の一月といへるに倫敦より乗船せ、六月に至りてトランケバルに到着せり。

基督の役者にきて、迫害に遇ひたるもの、外自ら進んで危険を冒したるものとは、未だ幾許もあるとなし。シユヴァアルツ素とより迫害を受けず、少くも反對抵抗を被らず、唯彼れは印度人の冷淡にして説教に耳を傾けながらも、尙ほ確信を起すに至らず。前回と同一の聴衆は、尙ほ前回と同一の説教を聞いて喜び、寧ろ前回の説教は全く無効なりしが如きを見て甚だ快からず思ひぬ。然るにシユヴァアルツは晩年に至りて幸にも政府及び軍隊の信用を得ると尠からず、猜疑の心深き印度王も暴政に苦む印度人民も、策略に抜目なき在印度英國政府も等しく彼れを厚遇するに至りしかば、シユヴァアルツ深く喜び、今まで著しき功業を立

るに由なかりま。トランケバルの傳道とは十六年間の關係を絶ち、一千七百六十六年基督教知識助長會の一員となりぬ。斯くてシユヴァアルツは一千七百六十七年トリチノポリに教會及び學校を設立し、居を此地に定めて、鎮臺兵の牧師を勤め、年々百磅の俸給を受けたり。而して此の年俸は全く傳道費に供せり。

シユヴァアルツはトリチノポリに在ると數年、時々附近の地を巡廻せしが主とて、ダンジヨルと云ふ地に趣けり。ダンジヨルはシユヴァアルツの助役者等が少らざる功を立てし所なり。シユヴァアルツの説教は極めて人々の注意を惹き、何れの地に至るも尊敬を受けざるを、其の説教の精神を得る能はざるものといへども、其の性行の高潔なるを慕はざるものは、一人も之れなかりき。シユヴァアルツ云く、此の結果恐らく、我が一朝永眠の後に於て露はれんとされど、その監督の下にありし、小教會も少きにあらねば、彼れは生前にありても、其の幾分を見たりと

いふべきか。

一千七百七十七年に至りて、シュヴァアルツの勤勞や、輕減せらるゝと同時に大いに好望を呈したり。こはトランケバル傳道會社が幾多の助役者を派遣し、且つ信者に於て傳道を助くるもの若干を生したれば、シュヴァアルツ日々此等の信者といふは、常に策勵を要する人々なりければ、シュヴァアルツ日々此等の人々を會え、教理を説明し、日々の事務を指示し、夕に至りて其の報告を聞くを常とせり。

シュヴァアルツのタンシヨルに至ると、爾後一層頻繁なるを得たり。か
は、此の緣故によりて、領主チユリア王の信用を博し、一千七百七十九年
には其の首府に會堂建築の許可を與ふるに至れり。尋でマドラス英政
府もまた之を許可せしければ、シュヴァアルツ直ちに建築に着手せたるに
寄附金思ふに任せず、止むを得ず、補助をマドラスに求めぬ。其の返書を
見るに、至急此地に來りて公使となり、ハイデル、アリオと平和條約を繼續

すべしとあり、シュヴァアルツは一見その意外なるに驚き、遂に返答の猶
預を乞ひしが、間もなくその命を拜せり。是れ蓋し印度の弊實を破り、其
の幸福を進むるに熱心なりしを以てなり。斷つて一己の利達顯榮を望
みて然りしにはあらず。またマドラス英政府が特にシュヴァアルツを擧
げて公使となせざるものは、ハイデルの乞ひによるといふ。ハイデル云く
貴政府の使者は、其の言及び其の條約に信頼し難きものあれば、貴政府
若し余と條約を繼續せんと欲せば、此國にありて、評判高き傳道者の一
人を送れ、余希くは之れを受け、之れを信せんと。

シュヴァアルツは公使として極めて好結果を奏し、政府の威嚴を損せず、
其職の柔徳を妨ぐるもなく、而も猜疑薄情の暴主を信服せまめたり。斯
くてシュヴァアルツはハイデルに傳道せんとせしが、彼れ元來宗敎心に
乏しきとて、其の乞ふが儘に神の恵み及び神の審判を演説したり。一
も、さえて感動の様子見へざりき。シュヴァアルツ此地に止まると三ヶ月

に去て、二三の信者を得たりといへども、其他に望みを屬すべきほどの成功はあらざりき。依て此地を辭し、ハイデルとは快く手を握りてマシヨルに歸りたるに、此の平和條約は極めて短命にして、シユヴァアルツは英國政府破約の罪を一身に負ふの止むを得ざるに至れり。ハイデル即ちカルナチツツを襲ふて之を屠り、殺傷算なく都民の逃走する様、實に憫然にして、マンシヨル及びトリチノポリの如きは、全都飢渴の民を以て充溢するに至れり。此の戦争は一千七百八十一年より一千七百八十三年に亘りて尙ほ局を結ばず、マンシヨルの光景尤も悲惨を極め、衣食給せず、疾病に罹りて死するもの夥しく、生き遺れるものといへども之を葬るの力なければ、死屍道途に滿ち、父母飢に堪へずして其子を賣るものあり。鎮臺兵は土人毎日に困苦せざりしといへども、尙ほ且つ大いに其の氣勢を減じ、城外の吶喊を聞て戦々兢兢たり。若し夫れ郊野に出づれば、許多の食糧ありといへども、農夫等何れも今までの虐待に

懲りて之を齎らすものなかりき。要するに農夫等は土人の王をも信せず、英國政府をも信せず。信用は全く地を拂ひたりきなり。ハイデル即ち英國方の一人に告げて云く、我れも君も共に信用なき、乞ふ土人が果えてシユヴァアルツ君を信用するや否やを試験せん。茲に於て乎彼の英人はシユヴァアルツに送るに白紙一枚を以てし、之れに土人と訂結すべき條約を記すべしと命し來れり。當時事皆急にして一刻も猶豫すべきにあらず。士兵已に飢に疲れて相尋で仆れ、慘澹の光景見るに忍びざりしを以て、シユヴァアルツは土人に命じて價高く買ひ取るべければ牛を持ち來れといひ、一二日間に一千頭を得て之を信者數人をして生命を賭して田舎に送りぬ。數刻の間に八万ガラムの穀物を得、城中をして僅かに完きを得せしめたりといふ。

シユヴァアルツの功勞は此小止らず。彼れは自費を抛ちて許多の米を買ひ、歐洲商人の惡謀を防ぎ、土人の飢に陥らんとするを救ひしとあり。

一千七百八十四年シユヴァアルツはチップー傳道を托せられたりしがハイデルの子其の領内に至るを肯せず偶々シユヴァアルツまたその健康を損ひ、此年七月には自ら死期已に近きといふに至れり、同年會衆の増加はマンシヨル城外に教會設立の必要を感ずるに至りしが、其の費用は多く自ら之れを支出せり。一千七百八十五年二月全國に數多の英學校を設立して土人と歐州人との交際を自由ならしめんと計畫し、マンシヨル及び外三地に英學校設立せらる。入學の書生は大抵上等社會にして、波羅門族及び商人その多數を占めたり。シユヴァアルツが此等の學校を監督するや、一に親切を旨とし、傳道の熱心と相如くどころなかりき。曾て自から云く、入學者は皆此の世の幸福を希ふが爲めに英語を學ばんとするの意なるべきも、彼等は之れに依りて善良なる主義を悟得すべし。余は何卒して彼等に永生の道を教へんと欲するものなれども、さりとて基督の道を傳ふるに策略を用ふるを屑とせず云々。此

學校は世俗的の方よりいへば多くの利益を與へしといへども、シユヴァアルツの預想は全く外れて一人の傳道者をも出すに及ばざりき。一千八百八十七年の一月、シユヴァアルツの友なるマンシヨルの王死に瀕す。王は子なかりきを以て、一人の幼兒を養ひしが年尚少なりて政を攝するに足らず。王の弟アミール、シングといへるものありといへども英黨と結托せるを以て、人民之を喜ばず。此時に方りてチュリア王使をシユヴァアルツに送り、遺孤を托して云く、これ我子にあらずして、即ち君の子なり。余即ち此の子を君に依托すと。シユヴァアルツは止むを得ずして此の乞ひに應じ、且つ云く、我れ不才にして依托の命を完ふするに堪へず、大王宜しくアミール、シングを擧げてその後見となすべし。此の勅告は素とより當然のものなりしものども、アミール、シングは極めて我儘に振舞ひ、前途甚だ安からず。シユヴァアルツ即ち東印度會社と共に力を合せて遺孤を助け、遂に安全に遺産を相續せしむるを得せしめ

たり。且つ又シユヴァアルツは其の幼年の間にありて精神的の教育を怠らざりしに、其の事全く無益に屬せず。他日の言行に著き感化を示すを見る。

シユヴァアルツの晩年には記すべき程の大事殆んどなし。シユヴァアルツは只管印度人の爲めに靈肉の幸福を計るに余念なく、専ら之れが爲めに力を盡くし居かるとなり。シユヴァアルツはカルナチツクの乾燥地を潤ほすべき水路視察の命を受け、之れが爲めに土地の物産を増殖せしむる程の好成績を得たとあり、或時はまたダンゾルの土民等非常の過徴に遇ひ、之れに堪へずして逃走し六月に着手すべき農耕の業を九月の初めまで放任し置き、飢饉の恐れ目前に迫りたるとあり。シユヴァアルツは國會の攻撃に答へて基督教知識助長會の爲めに、印度傳道者の功績を述べたる書中に云く、余は只管ダンゾル大王に乞ひて斯る過徴を免し、國民をして其の堵に安んせしむへ！といひたるに、王之

を容れ、使を遣はして國民に之を通牒せり。されど國民は之を信せず、遂に余に乞ふて書翰を送り、兩者の間に立ちて王は今後國王の爲めに仁愛なるべしといはしむ。余即ち其の言の如くせしに國民は時を移さずして歸り來り、第一日には七千人の多きに至り、其後續々として絶へず、余即ち農時を過ちたれば、非常の出精をなさざるへからすといへるに、彼等云く、貴下我等も對して仁愛ならば、何ぞ必ずしも貴下の心を煩はさん。我等は夜を日に次で働らき、貴下の好意に報ゆるところあるべしと。

シユヴァアルツの説教は速かに其の結果を見ざりしといへども、又決して無功にはあらざりしなり。且つ英國の基督教知識助長會に於ては益々傳道者の數を増し、シユヴァアルツが四十年の勞を以て播きたる種は目覺しき勢にて其穀を結び、都鄙に會堂の設立せらるゝもの實に夥しく、カダピール、ベベリー、チガバタム、バラコッタには傳道者の定住する

あり。トランケバル、トリチノポリ、ダンシヨル等と共に其の聯絡を通じて福音の光り何れの地方にも汎濫すべしと見へたりける。シユヴァアルツ又重病に罹りしが、此度は印度の南部の傳道者悉く其の枕邊に侍し、父と去て敬ひ愛し、又一人の名を呼ぶものなり。且つその事業は日に功績を奏し一千七百九十七年には、一月より十月中旬までシユヴァアルツの學生にして且つ助役者たるカスバル、コルホフといへるもの毎月曜日に土語と英語とを以て隔番に説教し、又已れは水曜日すゐりつひに第五十一聯隊の中なる葡萄牙兵及び獨逸兵等にうれしくその國語を用ひ講義をなし朝夕禮拜式の折に新約書の説明をなせまとも數週に亘り且つ又一日一時間は土人の小學校生徒を教へ、十月に及んでは今まで殆んど病を知らざりし身軀も最早望みなき摸様に見へたりける。友人等は何れも深く之を惜み去が、非常の重病にて苦惱一方ならざりしも、曾て顔に之を顯はさず、一千七百九十八年三月十三日喜悅平和の中に永

逝せり。其の葬儀に臨みて極めて悲傷悽愴の事あり、即ちダンシヨル王今一度シユヴァアルツが温厚貞實なる面を見たとの事にて棺の蓋を除き、王は暫く余念もなく其の遺骸を打ち注視り、涙を流して泣けり葬儀の間も涕泣の聲相響應し首を上ぐるものなり。實に國民幾多の不幸を救ひ五十年の間自己の快樂名利を計らずして偏に困難の衝に當り國王の後見となり、國民の友となり、曾て賄賂を受けず、曾て其の収入を私消せず、全く自己の生命を他人の爲めに抛ちし偉人の最後斯くもあるべきなり。

ダンシヨル王はシユヴァアルツの爲めに紀念碑を設立せんとてブラッスマンといへるものを其の建設委員となせり。又王はシユヴァアルツの肖像を先祖の肖像と并べ掛け、シユヴァアルツ紀念の爲めとして慈善の目的に供する建物を設立すると一二に止まらず、彼れ自らは基督敎信者にあらざり去ものから、シユヴァアルツの爲めとして基督敎徒には種々

の自由を與へ、宗教的儀式執行に少しも差支なからしめたり。基督教知識助長會の理事員等も争でマンシヨル王に後れを取るべきペーコンといへるものを去て寄附金を募集せしめ、マドラスの聖マリヤ教會内に其の紀念碑を設立せり。

余輩は此の編を結ぶに方りて監督ヘールの語を引用せん。

シュヴァアルツは五十年の長さ不信者の間に奔走せ、回教徒にも印度教徒にも、さては歐州政府にも非常の勢力と人望を有したるとは、今さら贅辨を費すまでもなく、只余が此の印度南部に來りし以來の感想を述べて止まん。余謂へらく、シュヴァアルツは幾多の善徳を具へたる人に相違なきといへども、彼れまた時々策略を用ひたるに相違なき。彼れは餘り政治上の事に奔走せり。又彼れは不信者の意氣に投合せんとを求めて自ら枉げて其の尊敬を買へり。土民はシュヴァアルツを以て尋常に異なる人となし、其の肖像には冠を戴かせ、又燈明を点

するに至るとされど、これには全く誤謬なりき。彼は實に使徒以來最も官功に、又最も活潑有爲の傳道者の一人なり。彼れが金錢のみに心を止めざりて一事はいふに足らず。彼れは全く名利權勢の慾を離れ、謙遜自ら處れり。又彼れの性質は單純無私にして、且つ快活なりき。彼れの政治上條約を訂結するや、これ無論シュヴァアルツ自ら求めたるにあらず、自然の趨勢として其の肩に落ちたるなり。公平正直を旨として之れに當り、遺孤の依託に遇ふて、克く其の任務を盡し、信者を出すと六七千の間にあり。

政治家の模範

ウイルベルフチース

Wilberforce

ウイルリヤム、ウイルベルフチースは常人の及はざる才能を以て鞠躬
 慈善の事業に當り一人なり。一千七百五十九年八月廿四日を以て祖先
 墳墓の地たる英國ハルに生れ幼にまて其の父を失へり。長するに及ん
 でヨークシャーなるボツクリントン文法學校ケムブリッジなる聖約
 翰學校等に歴遊し、千七百七十六年、千七百七十七年、頭聖約翰學校々友
 となる。その恰も丁年に滿ちたる時、未だ學位を得ざりトかども、千七百
 八十年の總撰擧に於て故郷より撰ばれ、千七百八十四年再び當撰す。然る
 にヨークシャー亦之を議員に撰びしかば、以後一千八百十二年に至る
 迄六期の間此の一大撰擧區の代表者たり。一千八百十二年より一千八
 百二十五年まで議員を罷めしが、カルワート卿の指命に遇ふて再びブ
 ランバル區より撰出せらる。ウイルベルフチースの政治主義は概ねビ

クトの派に屬し、一千七百八十三年フチックスの反對に立ちて印度條
 例を痛駁せしを以て名あり。一千七百八十六年刑法改正案を提出し、衆
 議院を通過せたりしも司法大臣サーロウ卿の氣受け宜しからず、上院
 に於て起立に問ふまでもなく排斥せられたり。

ウイルベルフチースが壯年となり頃には、世人尙ほ奴隷賣買の惡徳
 たるを知るもの尠し。奴隷賣買の不正のとにまて、基督教の主義に戻り
 たる商業なるを率先主張したるの名譽は、獨りクエーカー宗徒の享受
 する所なり。十八世紀の始めに方り、ウイルリヤム、ベン出で、ベンセル
 ベニヤのクエーカー宗徒先づ之を非難し、其後も此派の人々頻りに其
 の不法を鳴らし、一千七百六十二年遂に奴隷解放の義舉を决行せり。一
 千七百八十三年悲傷慘憺のとあり、國民の感情大いに激昂し、此に愈々
 奴隷賣買の不義を認むる端緒を開きたり。その故を尋ぬるに、クング號
 の船長保険料を食らんとて百三十二人の病弱なる黒奴を海中に投

たるに保險會社即ち之を訴へたり。其の辨解に云く、航海中飲用水に欠乏を生じたる爲め、此に至りなり。此間舟夫等別々其の食料を減せられし証據なかりといへども、遂に罪を問はずして止みぬ。されど此は正しく虐殺なり、實に無残の處置なり、之を罰するとなきは、國家法律の責輕まどせず。

クラークソンは此の憎むべき處置を衆議院に訴ふるも、議員に同意を求むる際、ウイルベルフチースを訪ふ。ウイルベルフチース云く、是れ我が今日まで幾度か思想を悩ましたる問題なり。我れ深く之れに賛成す。斯くてその事實の出處顛末を質し、憐愍の情に加ふるに信仰を以て、断然奴隸廢止の爲めに盡力せざるべからずと決心せり。此に於て同志の人々を屢々自宅に招き、一千七百八十七年には院外にありて委員會を組織せし。ウイルベルフチース自ら院内主論者たり。一千七百八十八年の初めに方り、豫め奴隸廢止法案を議院に呈出すべき意向を示し

たるに地位の不可なるものあり、ピット代りて之を提出し、次回の會期に於て議事に附せらるゝとせなれり。此に於てか一千七百八十九年ウイルベルフチース自ら樞密院の通牒に基きて議案を提出し、奴隸賣買の不義不法を論じ、黒人と白人の死亡数を比較し、西印度人口の増加を防遏するものは健康と道德の欠乏にあるとを究明し、之を結論して云く、此の人口増加を防遏する原因に於て取り除かるゝを得ば、亞弗利加黒人の輸入を禁歴すとも何等の不都合あるとなからん。ホルク、ピット、フチックス等の大政治家は皆此の議論に同意を表したり。すべてウイルベルフチースの演説は、雄辨に兼ぬるに熱心を以てし、正義と宗教の楯によりて提出する論鋒、勢ひなかく、當り難し。然るに此の問題の決議は次回まで延期するとなり、此の日及び其次の兩回も共に他の議案を議したり。

一千七百九十二年ウイルベルフチースが奴隸貿易禁止の動議に挿む

に「漸次」でお語を以てせんといふものあり、又之れと同一の政略を執れるマンマスといへるものは、一千八百年に至り、全く之を禁止せんと議案を提出せり。而えて衆議の上、遂に一千七百九十六年と改むるに決し、僅らに下院を通過したり、其の實況を熟視せざるべからずとのとにて、上院遂に之を阻めり。ウイルベルフォースは尙得も屈せず、年々歳々此の議案を提出之、之を飾るに新議論と新事實を以てし、終始其の主義を敷衍せり。一千七百九十九年議案の賛成者等は、何れも暫らく之れを差控ふるに決し、ウイルベルフォースは新聞雜誌に於て、僅かに其の蘊蓄を漏らすと五年に及び、此間彼れの院内に在りて、沈黙を待つものなるは此の問題に冷淡となりし爲めにあらで、全く時機を待つものなるを示すに怠らざりき。一千八百〇四年五月三十日、彼れは再び非常の雄辨と非常の勢力とを以て、奴隷賣買廢止案を提出せり、當時彼れの愛蘭議員の多數を説て其の賛成者となせり。愛蘭議員の賛成者に加はりた

るは此時を以て初めとなす。起立の結果は百二十四に對する四十九を以て原案全く勝利を得ぬ、斯くて下院を通過したり、又もや上院に於て阻碍せられたり。一千八百〇五年彼れまた此の動議を起したり、しか賛成者の中に通過を信すると厚きに過ぎ欠席せし者ありて、不幸にも先づ下院に於て失敗せり。されど一千八百〇六年には、フランクスマグレンザ、井ル卿等内閣に入りしかば、此度は政府自ら之を提出せんといふに至れり。只遺憾なりしは、國務大臣の多數は何れも賛成同意を表したれども、其中には之れに反對するものもありて、遂に斯る場合に及ばざりしとなり。然るに大狀師エ、ビゴット卿、戰勝地に於ける奴隷賣買を禁じ、又英國臣民の外國奴隷賣買に關係するを許さずとの一議案を提出するや、首尾能く法律となり、フランクスマグレンザまたウイルベルフォースの懇請によりて、奴隷賣買の形迹を全滅すべき最捷徑を執るべきとの議案を提出し、十五に對する百十四を以て可決せられたり。一千八百〇

七年一月二日クレンゲイル卿上院に於て、奴隷買賣廢止案を提出す、此に全く兩院を通過せり。然るに王は此案に對して不同意なる旨聞えければ賛成者の心配一方ならず、或は内閣大臣總辭職の結果に終るべきかとの杞憂もありしが、ては全く無根なりき。蓋し國務大臣は、三月廿五日を以て其の印綬を解くべしとの宣言に接したりといへども、同日また司法大臣エルスキンの署名を以て廢止案を勅裁せられたりければなり。

爾後ウィルヘルムフナースが國會に於ける運動は終始此の問題に對せし精神を失墜するとなかりき。又ウィルヘルムフナースは政治上の討論小互る時、主論者となりたると實に少しといへども、事若し宗教道徳に關し、衆員多くは之を度外に置き、主論者の必要なる時に溢めば、ウィルヘルムフナース未だ曾て已が意見を辨明するを辭せざりき。ウィルヘルムフナースの舊教公許論者にして又議院改革論者たり。又彼れは故府か

富籤類似の賭博を奨励するとを痛難し、幼年の兒童を去て煙突掃除となさしむるは残酷なりと主張し、ピット及びチルチーの近狀を引きて決闘に關する法律の改正を促かす。又一千八百十六年東印度會社の法改正せらるゝに乗じて印度に基督教傳道の急務なるとを陳述す。西印度に於ける傳道者の近狀は、英國の主權を維持するに害ありと極言せり。是等の諸案、只一つの決闘條例案を除きて悉く痛駁に遇ひ去といへども、大抵首尾能く通過するを得たりき。

ウィルヘルムフナースが著述家と稱せらるは主として「英國上中等社會の基督教徒間に行はるゝ宗教論と眞正の基督教を比較す」(A Practical View of the Prevailing Religious system of Professing Christians in the higher and middle classes in this country, contrasted with real christianity) 又題する書によると知らる。此書の目的は、英國上中等社會の事態管に福音の教と相近からざるのみならず、却て之れに借はざるものなりといふ

にあり。此書の出づるや、こは尋常の著述ならずとの好評噴々として傳はれり。或は必ずしも論辨の痛快なるが爲めにあらず、却て徹頭徹尾温厚仁愛の空気を以て之を貫きたればなり。而して其の然る所以のものは、全く此の問題の不入氣なるを著者の地位とを比較したるが爲めなりき。カルカツツ監督此の書の序言にいふ所の誠に至當の論といふへし、云く、著者は此の書を公けにするに方り、公人及び政治家に必要なる思慮威嚴功名榮譽を犠牲となせりと勇敢熱心天下の一人たるスコットも亦同様のとを論じて云く、此書によりて生すべき結果を思ふに、余は活動的基督教の好友また此くの如くなるものを記憶せず、ウイルベルフォースの人物たる實に余の預想の及はざりし所なりと。以て此の書の價直を察すべし。此書一千七百九十七年初版發行以來、英國に於ては凡そ二十版を重ね、米國にありては、更に多く、又大抵歐洲の各國語に翻譯せられたり。

ウイルベルフォースが國會議員として其の職務を盡すや、最も謹嚴に最も活潑なりき。又彼れが種々なる公會に參列し、宗教的慈善的の委員となりて其任を余ふせまに至りては、蒲柳の質能くも之れに當りしとて人々の只管驚嘆する所なり。千七百八十八年、病極決て重く、醫師ワレンは二週間を保証する能はざる程なりとあり、而してその健康は胸懷常に練如として余裕ありしによるもの實に多きに居る。又日曜日には堅く謹慎を守りしといふとも其の健康を助けたるや疑ひなし。ペン云く「ウイルベルフォースは日曜日に休暇せざりしならば、年壯の時に於ける政治上の運動と意氣とを繼續すると能はざるなりと斷言せしと余の屢々聞ける所なり。又彼れは其の同時代の人にして、政治上の問題に過度の力を用ひ、心を悩ませし爲め、死期を速くし、若しくは發狂ま、若しくは自殺し、日曜日を守りしならば、事茲に至らじと見ゆる多くの人を知り居たるなり」と。

ウイルベルフチーヌが非常の人望を負ひたりとは、一千八百〇七年の撰舉競争の費用として僅かに數日の間に二十万磅以上の金額かその撰舉人民によりて寄附せられよといふ一事に徴するも明かなり。おは實費の恰も二倍なりければ、半額は直ちに割ら戻したりといふ。斯くも人望ある候補者果して何處にかある。彼れか好ウイルベルフチーヌと呼バれたるもの過稱にあらず。若し夫れ政治上の技量よりすれば、彼れの右に出づるもの當時甚だ少からず。されど一人とえて彼れと撰舉を争ふほどの人望を有したるものはなかりしなり。ウイルベルフチーヌ辨舌流暢結構簡朴加ふるに音吐は下院の鶯と稱せられしほどの美しきあり實に有力なる一演説家なりき。

ウイルベルフチーヌ氏は一千七百九十七年を以てスプーチル嬢と婚す。嬢はベルミングハムなる大銀行家の女なり。遺子四人あり、ウイルベルフチーヌ一千八百三十三年七月二十九日老病を以てカトガンブレに歿す。遺命として葬儀の最も質素ならんことを望みたるに各政黨の領袖その親戚のものを勸めて、此の遺命を奉せざらめたり。其言に云く下名の両院議員は公共の道理に基づき、故ウイルリヤムウイルベルフチーヌ紀念の爲めに我等の敬意を表せんことを熱望す。又公共的名譽は斯る人類の恩人に與ふるの外なきとを信じ、そのウエストミンスター院に葬られんことを我等及び我等と志を同するもの其の葬儀に與がらんことを要望すと果して両院議員の會葬するもの夥しかりき。ウイルベルフチーヌの遺骸は、其の同時代の大政治家たるピット、フチックス、カンニング、等を埋葬せる處と僅かに數歩を隔つるのみ。

明治廿六年四月卅日印刷
明治廿六年五月五日發行

〔定價金二十錢〕

版權所有

著者兼發行者

田中

達

印刷者

山内

量平

賣捌所

南海

海堂

同

警醒社書店

印刷所

南海堂印刷所

東京市赤坂區新町五丁目三十六番地

東京市麹町區三番町三十五番地

東京市麹町區三番町三十五番地

東京市京橋區出雲町一番地

東京市麹町區三番町三十五番地

亞古士丁

植村正久君序

田中達君撰

(定價郵稅共二十錢)

右は平易なる文を以て使徒パウロ以後の偉人たる聖アウガスチンの傳を叙したるものなりアウガスチンは異教の才子より一變じて信仰の師父となり其の眞理の探究に熱心なるの故を以て之を世の求道者に推薦すアウガスチンの母は眞淑敬虔比類稀なる巾幗にして家庭の操作模範とすべきもの多き故を以て之を世の婦人社會に紹介すアウガスチンは神學上の知識該博にして創見多く信仰簡條の眞祖とも稱すべき人なり之を以て之を基督信者の全体に一讀を促す願くは續々購求あらんとす

批評

○女學雜誌 ○基督敎新聞 ○國民の友 ○經濟雜誌眞理 ○いのち ○護教 ○國民新聞 ○聖書之友月報

信仰之標準

植村正久 口譯

聖書の性質及び其解釋法に付ては惑を懐くもの少からず。今此の書は最も簡明に精確なる聖書論を記載したるものにて實に傳道者の指針、信徒の案内者として珍重すべき良著述なり

右兩書とも定價六錢、郵便切手七錢封入申込られれば無郵税にて遞送す

安心立命

福音新報社員譯

本書はヘンリッハ・ドラムモンド教授の原著にして Pax Vobiscum と題し有名なる「世界最大のものの」の續編なり。原因結果の理に基きて基督教徒の安心を得る方法を教ふるに極めて簡明なり。願くは一書を座右に具へて信仰の友となり給はんことを

人生之指南車

高橋五郎君序

(定價二十五錢)

森 堯道君著

●●●●● 目次 ●●●●● 紙數二百〇七頁

第一章人とは何ぞや ○第二章生命 ○第三章死 ○第四章目的 ○第五章世界 ○第六章道徳 ○第七章宗教 ○第八章神 ○第九章事業 ○第十章成敗
全篇總て十章収むる處何れも是れ人生最貴重の大問題古往今來世人の知らんと欲して知る能はず得んと欲して獲る能はず渴望して遂に到る能はざりし宇宙間の大秘蘊なり古來聖賢碩學の士を悩殺したりしもの實に愛に在て存す森堯道氏預言的の句調を以て此書を著はし問題毎に何ぞやと云ふ疑問を提起して以て大に此奧義を啓發し基督教は此暗濛濛たる雲煙を開導して人生の生路を全ふせしむる一大光明たるを論證せり行路難の人生に舟を遣る者誰れも此書を要せざらん人たる者誰れか此問題をに悩まざらん人上人上人信者よ不信者よ同胞よ兄弟よ願くは一本を購ひて貴重なる秘密の鍵を確握せよ

●●●●● 小説 眞如の月 ●●●●●

松琴居士著 (定價十五錢) 郵稅二錢

本書は曾て福音週報に掲載未だ大團圓に至らずして同志禁止の嚴命に接したれば残念ながら遂に腹稿中に葬り去りしを此度補ひ足して出版したるものなり居士の筆力と同週報愛讀者の徧く知る所若く夫れ小説の結構に至りては御購讀の上御高評あらんとを乞ふ

發行所

東京麴町區三番町三十五番地

南海堂

◎◎◎◎◎ 家庭之友 ◎◎◎◎◎

戸川安宅君序

田中 達君編

插畫 十一面 定價二十錢
所載談話十篇 郵稅 四錢

◎◎◎◎◎ 全國各基督教書店に於て取次販賣す

小説に似て小説よりも面白く小説よりも有益なる歴史的逸事十篇を集めたる書にて母親達が子女の爲めに教訓話をなすには屈強の材料なるべく日曜學校教師諸氏も一本を座右に備へ玉はゞ談話の種に余裕あらん

發行所

東京神田猿樂町壹番地

光 鹽 閣

福音新報

毎金曜日發行

社説

信仰上、神學上、社會上に關する新新有益なる論説を掲ぐ。大家の演説を坐ながら聞くの便利あるべし。

論説

神學界の動靜に關する忠實なる業なり。全國各地の教況藏めて此の一欄にあり。

其他家庭史傳雜錄外信等總べて靈魂の滋味なり。

福音新報

市內	一	部	三	月	卅	二	錢	五	厘
市外	一	部	三	月	卅	一	錢	五	厘
郵	六	部	半	年	六	十	錢	五	厘
稅	五	十二	部	一	年	分	壹	圓	拾
共	五	十二	部	一	年	分	壹	圓	拾

發行所

東京麹町區三番町三十五番地

福音新報社

日本評論

(毎月一回第二土曜日發行)

日本評論は黨派の機關にもあらず、金錢の奴隸にもあらず、眞理を發揮するを以て其目的とし、正義を唱導するを以て其の任とす。世に媚び時に投ずるは余輩の尤も拙じとする所なり。江湖諸士願くは一讀せよ。

市內	一	冊	六	錢
市外	一	冊	六	錢
郵	六	冊	三	十三
稅	五	十二	冊	六
共	五	十二	冊	六

發行所

東京麹町區三番町三十五番地

日本評論社

